

日本文化演習 報告書

第2号

平成 25 年 3 月

北海学園大学人文学部日本文化学科

新たな日本文化理解の可能性

—『日本文化演習報告書』第2号に寄せて—

人文学部長 安酸 敏真

日本文化学科主催の「日本文化演習」は今回でちょうど十回目となりました。今年度は23名の学生が参加しましたが、本報告書に示されているように、今回の「日本文化演習」もとても意義深いものだったようです。わたし自身もほぼ同時期に、英米文化学科を中心とする十五名の学生を率いて、「ヨーロッパ研修旅行」としてローマとパリを訪れてきました。書物や映像を通じて知ってはいても、実際に足を踏み入れたことのない都市を訪問して、自分の目と耳で見聞し、自分の肌で現地の文化に触れることは、教科書や教室の授業では得がたい体験となるものです。インターネットが発達した現代では、あらゆるものを自宅で手軽に疑似体験できますが、そのようなバーチャルな体験は、現地での実体験にははるかに及びません。まさに「百聞は一見にしかず」、つまり“Seeing is believing”なのです。現地の空気を吸い、特有の匂いをかぎながら、自分の足で巡り歩き、そこに暮らす人々と直に接することほど、文化理解に役立つことはありません。「日本文化演習」が企画された趣旨はそこにあります。

今日、このような体験的学習の意義が見直されていますが、「日本文化演習」は「ヨーロッパ研修旅行」と違って、通常の《異文化体験》ではありません。しかしこれもまた異文化体験に類似した、新鮮な発見と深い自省を呼び起こすものであるように思われます。

わたしたち日本人にとって、日本文化はいわば自明のものです。自明の事柄は意識的考察の対象とならないだけに、言語的理解の俎上に載せることが難しいものです。かつてわたしが京都の大学院生だった頃、たまたま接客した外国人の方から、なぜ神社の鳥居は赤いのか、西洋風の近代的な家屋に住みながら、なぜ日本人は玄関で靴を脱ぐのか、などと質問されて、言葉に詰まった経験があります。異他なるものとの出会いは、認識主体における自明性の盲点をはじめて意識に上らせるものです。いわゆる異文化体験の意義はそこにあります。しかし異文化体験は、空間的・地域的な意味だけでなく、時間的・歴史的な意味でも存在します。

明治維新以後の日本は欧米の圧倒的影響下にあり、東京を発信源とする今日の日本文化は、いわば欧米文化の日本版にほかなりません。しかしそれ以前の日本には、これとは明らかに異なる形態の日本文化が存在していました。奈良・京都・大阪方面には、《日本文化の古層》がいまなお息づいています。それは同じ日本文化でありながら、今日の自明的な日本文化とは別種のもので、源流における日本文化に触れると、みずからの日本文化理解に巣くう盲点を痛撃されて、自文化への深い反省と新しい理解へと導かれるものです。これも一種の《異文化体験》と言えるでしょう。以下の各頁には、このような体験が豊富に綴られています。是非ご一読下さい。

奈良

1. 飛鳥石舞台古墳
2. 飛鳥石舞台古墳（内部）
3. 飛鳥寺
4. 永井一彰先生（講演者、奈良大学教授）
5. 講演風景（奈良大学演習室）
- 6～7.
板木（版木）を手にとる（奈良大学演習室）
8. 平城宮跡（遙か彼方に大極殿が見える）
9. 平城宮跡を貫く近鉄電車の線路（背後に朱雀門が見える）
10. 平城宮跡を散歩
11. 雪化粧の若草山
12. 鹿さんに愛されるアイトル教授
13. 大極殿の前で記念撮影





14



15

滋賀

14. 雪の彦根城
15. 雪の彦根城を下っていく（滑って転ぶそう）
16. 彦根城をバックに記念撮影
17. 玄宮園（彦根城内）
18. 比叡山延暦寺
- 19～21.

江戸時代の風情が残る近江八幡の旧市街



16



17



18



19



20



21

大阪

22. 斎藤玲子先生の講演風景（国立民族学博物館セミナー室）
23. 斎藤玲子先生（講演者、民族学博物館助教）
24. アイヌの展示コーナーでの解説風景



22



23



24

研修旅行時にお世話になった方々

25. 添乗員の浦口宏之氏（ブルーツーリズム北海道）
26. スーパーバスガイドの中瀬裕加利さん（明星観光）



25

26

京都

京都に関しては、学生たちのレポートの中に自主研修時の写真があるので、ここでは割愛する

北海道の若き学徒による 「京・阪・奈+滋賀」新感覚見聞

教務委員 寺田 吉孝

平成24年度の第10回日本文化演習は、平成25年2月18日(月)から23日(土)まで5泊6日間の日程で、奈良、京都、大阪、滋賀方面で実施されました。参加者は1部23名、2部4名の総勢27名の学生諸君でした。引率には、テレングト・アイトル、大石和久、田中綾、寺田吉孝の4名があたり、さらに、(株)ブルーツーリズム北海道の浦口氏に全行程添乗いただきました。新千歳空港出発時、雪の影響で離陸の遅れが危惧されましたが、幸いにも大きな遅延なく無事関西空港に到着できました。現地では冷たい雨と湿った雪が待ち構えており、寒さに強いかわれた道産子の学生たちも震える毎日でした。しかし、風邪をひく者もなく、また全期間を通じて大きなトラブルもなく無事に演習を終えることができました。今回の研修日程は以下の通りです。

	月日	移動・研修	日程	宿泊
1	2/18(月)	移動 団体研修	新千歳空港(12:00発)→関西空港(14:15着)<JAL2508便> 空港→飛鳥・石舞台古墳→飛鳥寺→ホテル <貸切バス>	奈良泊 (ホテルフジタ)
2	2/19(火)	団体研修	ホテル→興福寺→奈良大学(永井一彰教授の講演、大学博物館見学、学生食堂にて昼食)→朱雀門→平城宮跡→平城宮跡資料館→自由行動(東大寺、春日大社など)→京都へ <貸切バス>	京都泊 (ザ・パレスサイドホテル)
3	2/20(水)	自主研修	学生各自で行動	京都泊 (ザ・パレスサイドホテル)
4	2/21(木)	団体研修	彦根城→近江八幡(新町通り、郷土資料館、八幡堀)→比叡山・延暦寺(根本中堂) <貸切バス>	京都泊 (ザ・パレスサイドホテル)
5	2/22(金)	自主研修	学生各自で行動	京都泊 (ザ・パレスサイドホテル)
6	2/23(土)	団体研修 移動	ホテル→国立民族学博物館(齋藤玲子助教による講演を含む)→大阪ミナミ→空港 <貸切バス>関西空港(19:50発)→新千歳空港(21:40着)<JAL2513便>	

昨年の12月には、引率教員4名がガイダンスと講義を実施し、現地での研修が充実したものになるよう事前指導(専門的、一般的)を行いました。これらを踏まえ、受講生たちは自主研修時の計画を立て、事前レポートの形で提出しました。

昨年よりも大幅に参加人数が減り、日本文化演習に対する学生たちの関心が薄れてきたかのように思われました。しかし、参加した学生たちは、意外と言っては失礼ですが、意欲的な行動の6日間を過ごしてくれたと思います。ふだん京都、奈良、大阪を訪れる機会のない北海道の若者たちは、新鮮な感覚で「京・阪・奈+滋賀」のもろもろの事物に直に触れてくれたと思います。その成果は本報告書の随所に見られますので、ご一読お願い致します。

レポートの掲載にあたっては、体裁を整える必要から表記の統一など最低限の手直しを行いましたことを申し添えます。また、今回は(株)パスカル・プリンティングさんのご好意により全ページをカラー印刷していただくことになりました。この場を借りて感謝申し上げます。

目次

● 研修旅行で感じた、日本の歴史	安部 真純… 1	● 歴史的建造物の価値	能戸 和… 22
● 研修旅行において学んだ事	石原 若奈… 2	● 寺社・仏閣を巡る旅を終えて	藤田 晏生… 24
● 外にある歴史の体験	白井 美沙… 3	● 琵琶湖疏水を歩く	松井 洋平… 26
● 日本の神仏習合について	大内 美咲… 5	● 日本文化研修を終えて	峯本慎太郎… 28
● 『源氏物語』 ゆかりの地を訪ねて	小玉 恵理… 6	● 京都を巡って	村上 悠人… 30
● 研修旅行を終えて	佐藤 茜… 8	● 飛鳥大仏、阿修羅像について	室井 竣… 32
● 古典文学、歴史に触れる京都の旅	佐藤瑛理香… 9	● 嵯峨野人情めぐり	茂木 彩香… 34
● 「双葉葵の神紋」と「玉依姫」	澤田 範子… 11	● 歴史的文化財めぐりを終えて	森 矢真人… 35
● 冬の古都を巡る	杉山 麻衣… 13	● 京都探訪	龍崎 峻… 37
● 京都の寺社を歩く	高橋 尚子… 15	● 日本文化のあらゆる趣に触れる	樋口 麻紀… 39
● 研修旅行での体験	竹内 元輝… 16	● 初めての関西旅行	山下 凜… 40
● 「京都」歴史と文化の街	富田侑葵子… 18	● 現実逃避研修旅行	米倉 拓斗… 42
● 京都の寺院の美しさについて	那須 哲朗… 19	● 関西を訪れて	筒井 千尋… 43
● 京都の風景という「画」	根布 大地… 21		



研修旅行で感じた、日本の歴史

1 部日本文化学科/

2 年 2711102 安部 真純

研修初日。北海道の新千歳空港を出発し、関西空港に着いたのが午後二時ごろ。外は雨が降っており、空港を出ると雨の日独特の匂いがしていた。この日まず見学したのは奈良の石舞台古墳と飛鳥寺である。石舞台古墳では学校の勉強でしか聞いたことのなかった「羨道」や「玄室」という古墳の造りを実際に見ることができた。飛鳥寺では厳かな雰囲気を感じ、身の引き締まる思いだった。

二日目は、引き続き奈良を回り、興福寺や東大寺・春日大社などを巡った。興福寺では長年見たいと思っていた「天燈鬼・龍燈鬼像」を見ることができ、感激した。東大寺・春日大社は自然に囲まれた場所で、昔ながらの風景を多く残している場所であると感じた。

三日目は自由研修日であり、私は下鴨神社、六波羅蜜寺、建仁寺、伏見稲荷大社を巡った。下鴨神社に到着したのが朝七時半頃、朝の澄んだ空気の中で見る境内はとても神聖で、清浄な気持ちのまま、六波羅蜜寺に向かった。六波羅蜜寺には宝物館という国宝や重要文化財が収められている場所がある。誰もが教科書などで一度は見たことのある「空也上人像」や、「運慶坐像・湛慶坐像」などを見ることができた。やはり写真だけでは解らなかった造りの精巧さや迫力は、現物を見なければ伝わらないものであるのを感じるのと同時に、仏像の素晴らしさを少し理解できたのではないと思う。その後訪れた伏見稲荷大社は、鳥居が多く存在することで有名な神社であるのだが、頂上の場所にまで鳥居が続いていて、それぞれの鳥居に個人の名前や団体名が刻まれている。多くの人々が願いを込めて鳥居を建てている歴史を垣間見た。

四日目は比叡山・延暦寺、近江八幡、彦根城を巡った。私はこの研修で一番印象に残っているのが比叡山・延暦寺である。バスを降りて近づいただけで、それまで訪れたどの神社や寺院よりも力強い何かを感じた。あまりにも力強いパワーであったために少し恐ろしくなってしまうほどであった。だが、内部の厳かな雰囲気は包まれて守られているような大きさ、広さのようなものを感じた。このようなことから、この研修で最も印象に残っているのが比叡山・延暦寺である。近江八幡では時代劇の撮影が行われるほど、歴史的な景観がしっかりと残っており、冬の雪景色もまた見事なものであった。姫路城などを訪れたことはあったのだが、歩いて回るだけで、城自体の説明を受けて見学したのはこの彦根城が初めてであった。壁の造りや階段の構造など、知識としてしかなかったものを実物で見ることができた。

五日目は嵐山方面を巡った。まず向かったのは世界遺産にも指定されている天龍寺である。天龍寺は庭が絶景であった。天龍寺の庭園は禅僧である夢窓疎石が造ったものであり、背景や池の配置なども全て計算していたという。その通り、本当に素晴らしい景色であっ

た。また嵐山を流れる桂川を船で往来した。春や秋が最も美しいということであったが、冬の景色の侘しさも風情のあるものだと感じた。

六日目は国立民族博物館を訪れた。残念ながら、日本文化のコーナーは見ることはできなかったが、めったに見ることのできない諸外国の文化に触れることができたのは嬉しい収穫であった。

この研修全体を通して、あらためて日本文化の魅力を見つけることが出来た。訪れた場所それぞれに、人々の生活していた歴史を感じた。北海道にはあまりそういった場所はないため、全てを新鮮な気持ちで見ることができた。「過去に眼を閉ざす者は、未来に対してもやはり盲目となる」といった人物がいたが、歴史は人々を導くものとなる。それを大切にするために、私は歴史を学んでいくのだと思わせる研修となった。

研修旅行において学んだ事

1 部 日本文化学科

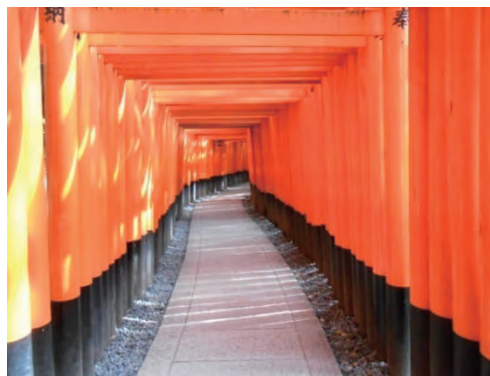
2 年 2711104 石原 若奈

私は今回の関西への研修旅行でいくつかの貴重な体験をしてきた。

まず挙げられるのは、三日目の自主研修日だろう。私は二人の友人と行動を共にして最初の下鴨神社に参拝し、次に六波羅蜜寺で空也像などを見てから建仁寺へ足を伸ばし、最後に伏見稲荷神社へ向かうと言う、時間的にゆとりを持ったコースを取った。

私がこの日の工程においてもっとも印象に残ったのはやはり伏見稲荷神社である。

大きな鳥居の横には狛犬ではなくその代わりに二体の狐の像が参拝客を出迎え、千本鳥居と呼ばれる数多くの鳥居をくぐりながら、いくつもの社を巡りつつ頂上へ向かって行くのだが、頂上の標高は実に 233 メートルであり、軽い登山気分である。ずらりとならんだ鳥居の様子は圧巻以外に表す事が難しい。



やや古さを感じさせるそのいでたちもまた風情を醸し出しており、鳥居の隙間から覗く山の様子はとても美しいものだった。

山を登って行くに従い人影はまばらとなり、
どんどん空気が澄んでいくような感覚さえあつた。
山頂に至ってはほとんど人はなく、女性の
影は全くなかった。

伏見稲荷神社の山頂まで登る事が出来たのは、
本当に良い経験になったと思う。そこに至るま
でにいくつもの社や狛犬の代わりに狐の像を見
て、そのつくりや表情の違い、あるいは狐でも
狛犬でもなく馬が飾られている所なども見つけ
る事が出来た。道中は体力的に辛く、また道が解らずに迷ったりもしたが、友人に助けら
れながら無事に下山する事が出来た。山頂から眺めた景色はとてもきれいなもので、北海
道などでは中々眺められるものではないだろう。もしまた機会があれば是非とも伏見稲荷
神社に参拝し、山頂まで登りたいものである。

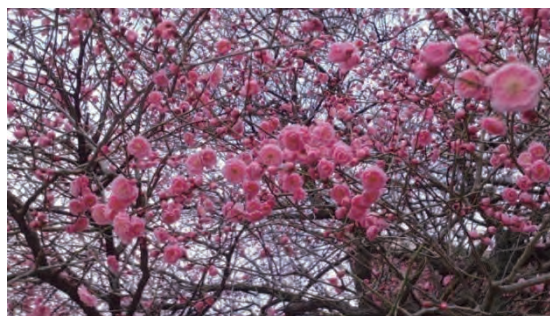


外にある歴史の体験

1部 日本文化学科

2年 2711110 臼井 美沙

六日間にも及ぶ関西への演習旅行は、大雪や冷たい雨などもあったが北海道では味わうこ
とのできない貴重な体験が出来た。世界遺産にもなっているような寺社を見に行けたことも
そうだが、二月であるのに雪のない道路であ
ったり梅の花がすでに咲いていたりするの
をみると「この時期ってもう春になるんだ」
と少しショックを受けた。このように北海道
からあまり出たことのない私だが、今回の旅
行で多くの場所をまわり、その中でも特に印
象に残った所をまとめてみたいと思う。



自主研修の二日目。天気も良く少し暖かい日で、西本願寺や東本願寺、東寺を順調に巡
った。次の目的地は東福寺であり、バス停を降りて看板に書いてあった矢印の方角に素直に
従い、のんびり歩いた。東福寺は鎌倉時代にときの摂政関白であった藤原（九條）道家によ
って九條家の菩提寺として造営されたお寺で、南都東大寺と興福寺から「東」と「福」の字
をとって東福寺と名付けられたらしい。この東福寺、まわりに25もの寺院があり、私が歩
いたバス停から東福寺への道にも取り囲むように寺院が立ち並んでいた。看板通りに進んで
もしばらくそれらしいものが無く道の両側が小さな寺院ということもあって、もしかしてす

でにここは東福寺の敷地内なのではないかと私は思ってしまった。後から知ったことだが、まわりの寺院は塔頭と言って、寺院の敷地内に隠退した高僧が暮らすために作られた寺院であるためあながち間違っていないかったのだが、なにせよ庭が有名という前情報のため途中にあった霊雲院の方へと続く道へ行ってしまう、多少混乱していたが日向でのんびりしつつもしっかりと九山八海の庭を楽しんだ。それから道を戻り、すぐそこに東福寺があったためようやく目的地へとたどり着いた。東福寺は国宝である本堂の他にもそこらに重要文化財がある素敵な場所なのでいろいろと楽しく見てまわれた。東福寺は美しい紅葉が見られる紅葉スポットであるため、今度は葉のある時期に来てみたいと思った。その後駅までの道にあった雪舟所縁の地である芬陀院の雪舟庭園を見て次の目的地へと向かった。蛇足になるが、東福寺駅の近くにある「縁結びカフェ ここはな」というお店の東福寺パフェはすごくおいしかった。



自主研修の二日目には伏見稲荷大社にも行った。有名な千本鳥居のあるここは全国の稲荷神社の総本山であり、商売繁盛や五穀豊穰、交通安全などのご利益があるらしい。本殿の方には願い事が叶うなら軽く叶いにくいのなら重くなるという「おもかる石」があるが、もちろん試してみた。周りの人たちと同じようにお賽銭を入れていざ試そうとしたら、私にとってちょっとショックなことが起きた。お賽銭が賽銭箱に当たり、弾かれてその後ろにあった排水溝の方へ落下してしまった。隣のおもかる石を試そうとした人がそれを見て動揺していたし、後ろの友達も笑っていた。すぐに落ちた十円を探しに行くと絶妙な角度で排水溝の隙間に刺さっていた。気を取り直してきちんとお賽銭を入れ直し、なんとか気合いでおもかる石を持ち上げられたので少しスッキリした。稲荷山も半分程登ったが、動機息切れがするうえに右の写真の道を見てもう諦めて、帰りに雀の丸焼きを食べて駅まで向かった。



この他にも奈良公園で鹿に群がられたり、初めての竹林にはしゃいだり、彦根城で「ひこにゃん」を連呼したりと楽しい演習旅行だった。二日間の自主研修はすべて京都市内をまわったが、それでも京都の行ってみたいところはまだ多い。また、教科書に出てくるような有名な場所にもいくつも行ったが、やはり実際にそこへ行ってみないとわからないことは多いように思える。この時期の京都の気温や天候であっても、京都にいた偉人たちもこんな季候の中に居たんだと思うと少し思うところがある。旅行では様々な貴重な体験をすることが出来たが、次はこの体験は活かせるように歴史や文化について多くのことを学んでいきたい。

日本の神仏習合について

I部日本文化学科

2年 2711113 大内美咲

私は、この研修旅行で日本の寺と神社の関係や文化の混ざり合いについて調べてきた。神道は日本に古来からある土着信仰で、仏教は中国からさまざまな大陸の文化とともに伝来してきたものである。後から入ってきた仏教が日本中に広まり人々の信仰を得る一方で、神道の信仰も人々の間で絶えずに続いてきたというのは、キリスト教が広まることによりもともとの土着信仰を失ってしまったヨーロッパなどと比べると、考えてみれば不思議な話である。日本神道では神々は八百万ほどいるという考えで、仏教でも毘沙門天や弁財天などインドに古来から伝わる神々を取り入れているため、両者は対立せず共存することができたのだろう。

神道と仏教は、共存するうちに互いの文化や習慣が混ざり合い、折衷されている。日本に古来からいる神々を仏教の護法善神（天部の神々）とし祀ったり、逆に神道に仏教の要素を取り入れたものが修験道である。こういった混ざり合いを神仏習合という。よく、神社と寺が隣同士に建てられていることがあるが、これは鎮守社といって、寺院を守るために神社を建てているからである場合が多い。清水寺と地主神社がそうである。地主神社自体は日本建国以前からあるとされているが、江戸時代までは清水寺の鎮守社で寺の一部として扱われていた。明治時代の神仏分離により分かれて地主神社として独立した。また、鎮守社とは逆に、神社の下に作られた寺、神宮寺が存在する。神宮寺で代表的なものは、春日大社の神宮寺の興福寺である。これは仏教が広まるうち、神道が仏教を取り入れたもので、本地垂迹という日本の神々は仏教の仏が仮の姿をとった権現であるという考え方があらわれたのもあって、特

に平安時代以降特に広まっている。神宮寺では、神社に所属する僧が神前で読経を行ったりする。神宮寺も、鎮守社同様、明治時代の廃仏毀釈や神仏分離により、今では寺と神社はほとんど別のものとなっている。



また、八坂神社の祭礼である祇園祭は、明治時代までは祇園御霊会と呼ばれていた。御霊会とは霊の祟りを防ぐために読経などを行う神仏入り乱れた儀式のことである。元来その土地や氏という限られた範囲で信仰されてきたはずの仏教の神々、たとえば伏見稲荷大

社のお稲荷様、ウカノミタマノカミが日本中で広く信仰されているのも、仏教の影響が強いといえる。日本神道はその土地その民族の中でのみ信仰される民族宗教だが、仏教やキリスト教は土地に依存しないため世界中に広まっている普遍宗教である。もともと狭い土地でのみ信仰されていた神を、日本中に広めようという考え方は、普遍宗教での布教に似ている。

これまで述べたように、神道と仏教の混ざり合いについては、神道が仏教化していく場合が多く、どちらかといえば仏教の優位だったと思われる。とはいえ、これは江戸時代以前、寺院が力を持っていた頃の話で、現代ではどちらも同等のものとして扱っているといえるだろう。われわれは、ほとんどの人が葬儀は仏教徒として行い、神道式の葬儀について知っている人は少ない。けれども、何か願いごとがあれば神社へお祈りへ行くし、新年のはじめには初詣に行き、神社で行われる祭りに参加する。ほとんどの人が、どちらに比重を置くこともなく、なんとなく仏教や神道と接して生活していることだろう。むしろ、目に見えるご利益が期待されるぶん、神社を好む人のほうが多いかもしれない。わたしは、このことについて、現代の日本人があまり自分の信仰について意識しないこともあるかもしれないが、日本人は昔からこうして生活してきたのではないかと考えている。寺と神社が共存してこられたのは、人々が仏教と神道、その両方を程度の差はあれ重んじてきたからである。仏教という巨大な普遍宗教に飲み込まれることなく、その信仰を保ってきた日本神道と、それを守ってきた日本人は、世界から見ても独特の宗教観を知らず知らずのうちに持っているのかもしれない。

『源氏物語』 ゆかりの地を訪ねて

1部 日本文化学科

2年 2711133 小玉 恵理

今回の演習で、私は文学作品の中でも好きな『源氏物語』に関連のある場所を巡ることにした。特に自主研修の日に訪ねた宇治市は「宇治十帖」の舞台となっていることから、『源氏物語』の世界観を覗き見ることが出来るのではないかと期待し、研修に臨んだ。

初めに訪ねた平等院は光源氏のモデルの一人とされる源融が宇治市に邸宅をかまえていて、それが後に藤原道長のものとなり、そして頼通が寺にしたものである。また、『源氏物語』で登場する光源氏の息子、夕霧の別荘のモデルともされている。表門を入りしばらく進むと大きな阿字池が現れ、さっそく十円硬貨で有名な平等院鳳凰堂が見えてくるはずなのだが、残念ながら修理工事中でテントのようなもので覆われていて見る事が出来なかった。仕方がないので池に沿って歩いていくと鳳翔館というミュージアムがあり、そこで国宝を見ることにした。その中で特に雲中供養菩薩像には心惹かれるものがあった。平等

院には雲中供養菩薩像が計 52 体配置されている。その内 26 体がミュージアムにあり、文字通り菩薩様が雲の中(上)にいて楽器を持っている菩薩様、さらに、裏に「愛」の一字がある菩薩様もいて見ていて飽きない素晴らしいものであった。雲中供養菩薩像は本来ならば平等院鳳凰堂内の壁に並んでいるはずなので、恐らくとても見ごたえのあるものなのだろう。そう感じつつ、次の場所へと向かう。

宇治上神社に行く際に渡る朝霧橋では橘島と塔の島が見える。こちらも河川工事改修のためクレーン車や工事音が入り、雰囲気ははっきりとってしまえば台無しではあった。しかし、「宇治十帖」で勾宮と浮舟が宇治川を小舟で渡る場面で季節がまさに 2 月の寒い時期であり、まさに研修の時期とぴったりと重なったので、なるほど、確かにこの寒さの厳しい季節の中、流れが激しい宇治川を小舟で渡るというのは恐ろしいものであったろうと感じとることが出来た。



橋を渡り宇治上神社にたどり着くと、「二度あることは三度ある」という言葉があるように、こちらも補修工事がされていて木の枠組みで囲まれていてあまり見ることが出来なかった。『源氏物語』と宇治上神社の関係性はというと、宇治上神社は平等院の対岸に位置しており、先にも述べた様に平等院が夕霧の別荘であることから、それではその対岸に位置する宇治上神社辺りに八宮の山荘があったのではないかとされ

ているのである。八宮は何を思い、何を感じたのか。もしかしたら八宮は宇治川の音に耳を傾けていたのかもしれない。何故か昔は静かでひっそりと存在していたかのような雰囲気がそこにはあった。

話は変わるが、宇治上神社やその近くにある宇治神社にはウサギに関するモノが数多くある。そもそも「宇治」という地名は、かつては「菟道」（うさぎのみち）と書いて「うじ」と呼ばれていたそうである。宇治上神社の御祭神『菟道稚郎子』も「菟道」と書かれ、このことから宇治上神社がウサギと深い関わりを持っていたことが理解できる。ちなみに余談であるが、宇治上神社はお守りの紋やおみくじもウサギであり、私もおみくじを引いてみたのだが「旅行」のところに「遠くは行かぬが利」と書かれていた。確かに宇治という遠いところに来たものの行く先々工事中でなんとなく運がついていない。しかし、歴史を保護していく上で工事や補修作業はこの地には多いことは当たり前のことで、これも歴史多き京都ならではのことでないかと自分を納得させ、私の研修は終了した。

最後に、今回の 6 日間を通してやはり資料や文献などといったものだけでは自分の満足

のいく答えや、理解を深めていくことは難しいのだろうと感じた。私は主に『源氏物語』の理解度を深めることを目的として過ごしたが、その場所のあらゆる刺激を五感で感じることによって理解を深めるばかりでなく、新たな発見や疑問も見つけることが出来た。これは現地に実際に行くからこそ出来ることだと私は感じる。この長かったような短かったような旅が終わって、さらに『源氏物語』に対しての研究意欲が高まったことは言うまでもない。



研修旅行を終えて

1 部 日本文化学科

2 年 2711142 佐藤 茜

五泊六日の研修旅行を終え、私はとても充実した気持ちで北海道に戻って来ることが出来た。様々な思いはあったけれど、先ず言えるのはこの旅行に参加して良かったという思いだ。例え寒さに身を震わせている時間が長かったとしても、例えちらつく雪に散々な思いをしたとしても、それでも今回の関西への研修旅行はとても有意義なものであり、今まで知らなかったことに触れることの出来た良いものであったとこうしてレポートに書くことができる。

私がこの研修旅行で一番印象に残っているのは、自主研修二日目に行った八木邸である。本来行こうとしているところではなかったのだが、壬生寺と共に新撰組に関係のあるところであるとは知っていたので、公開中の時間であった事もあり足を運ぶことにした。入場料は1000円と値が張ったけれど、その額に見合うだけのものを八木邸から得る事が出来た。今回行った八木邸で新撰組は発足した。その後壬生寺に屯所を移し、更に組織が大きくなって別の場所へと移って行くのだが、今回は其処までを見学する事が出来なかったので割愛する。新撰組の最盛期は正に八木邸で過ごした期間であり、この八木邸である一つの事件が起こったのである。それは、初代新撰組局長である芹沢鴨の暗殺である。芹沢はとても武勇に秀でた人間であったが、次第に近藤率いる隊員たちが中心となって決めた新撰組の法度を破るようになっていく。それに芹沢が率いていた隊員たちが同調するようになり、

新撰組の評判と云うのはどんどんと悪化の一途を辿っていた。それは、新撰組を当時抱えていた松平容保の評判を下げることに繋がり、松平は後に局長を務めることになる近藤勇たちに芹沢らの暗殺を依頼したのである。芹沢は酒に弱く、近藤たちが開いた宴会で酒を大量に勧められ、泥酔状態になって八木邸へと戻ってきて、床についた。其処に近藤率いる隊員たちが覆面で現れ、芹沢たちを暗殺しようと企てたのである。八木邸内に通されたとき、最初に入った部屋がその芹沢たちが床についた部屋であり、とても興奮したのを今でも覚えている。しかし、泥酔していても芹沢の剣の腕は鈍ることはなく、廊下を渡って隣の部屋まで争い、最終的には八木家の家族が使用していた机に足を引っ掛けて躓いてしまったところを狙われて暗殺されたと伝えられている。八木邸には今もその当時につけられた刀傷や、芹沢が躓いた八木家の机などが残されており、残念ながら触れることは出来なかったけれどとても貴重なものを見ることが出来た。新撰組発足に至るまでの経緯や、発足してから有名になるまでの道程など、話の内容は本当に 1000 円で聞いても良いのかと思う程充実した内容であった。

今回の自主研修では主に幕末の時代に起こった有名な出来事がなされた場所を中心に巡ったが、他にも京都には沢山の巡ってみたいところが多く、その全てを周り切ることが出来なかったのが本当に悔しく思う。また機会があれば行ってみたいと思うし、何度訪れても良いところである関西は、行く度に新たな一面を知っていくのだろうと思う。今回、そんな関西に行く機会が出来たこの研修旅行は改めて良いものだ実感した。次に行く機会があるならば、幕末だけではなく江戸時代全体を追うことの出来る場所に行ってみたいと考え、それを歴史に残っている順番に辿っていきたいと考える。

古典文学、歴史に触れる京都の旅

1 部日本文化学科

2 年 2711144 佐藤 瑛理香

私は今回の日本文化演習の自主研修において、古典文学や様々な歴史の舞台となった京都で古典文学や歴史に触れることを目的とし、自主研修 1 日目は宇治、2 日目は二条城や壬生寺などを訪れた。今回のレポートでは、自主研修を通して私が感じたことや新たに発見したことなどを記す。



J R 稲荷駅 建物も神社風である



千本鳥居を横から撮った図

まず1日目はかねてより行きたかった伏見稲荷大社へと向かった。最寄りのJR 稲荷駅は建物も神社風の色合いであり、駅に降りた瞬間から伏見稲荷へ来たと実感させてくれる駅である。夢だった千本鳥居を歩くことができ大変嬉しく思ったが、思ったよりも登り道が続いたために息が上がり、自分の普段からの体力の無さを痛感し、その後の予定もあったため途中で登るのを断念し引き返した。その後は源氏物語、宇治十帖の舞台である宇治を訪れた。宇治は道の案内表示がとてもわかりやすく、京都市内と比べると少し落ち着いた雰囲気であった。宇治に来たからにはとまず平等院へ行ったが、現在は残念ながら工事中である。しかし平等院ミュージアムで鳳凰などの多くの国宝を見ることができた。十円玉でお馴染みの平等院の建物の姿を見ることはできなかったが、一万円札でお馴染みの鳳凰の姿を見ることができ、大変感動した。その後は宇治川を渡り、いよいよ源氏物語の宇治十帖の世界へと足を踏み入れた。宇治川の速い流れを実際に見て、友人とこの早い流れは浮船も怖がるだろうと話した。物語の舞台へ実際に足を運び、文学の世界を体感することは初めてであったため、貴重な経験をすることができた。塔の島、宇治神社、そして世界



宇治川と紫式部像

遺産に指定されている宇治上神社を経て向かった源氏物語ミュージアムには平安時代を再現したセットや、主人公である光源氏の建てた邸宅である六条院のジオラマがあり、源氏物語の世界を堪能した。また、源氏物語にも登場する香木の香りを実際に嗅ぎ比べることができ、平安時代の貴族はこのような香りを焚いていたのかと思いを馳せることができたのは良い体験であった。そして最後にミュージアム内で宇治十帖をテーマにした映画を鑑賞した。

自主研修2日目は1日目の平安時代とは打って変わって幕末の歴史に触れる一日である。最初に向かったのは事前に予約していた京都御所である。一番に目に入ったのは綺麗な白い壁である。建物は古くからあるものに対し、ここまで真っ白な壁は見たことがなかった。恐らく、観光客は近寄ることができないためであると考え。参観には事前予約が必要な上に案内つきであることから窺える。最も気になったことは、天皇の日常生活の場として使われていた御常御殿内に敷かれている畳のへりの色が赤かったことである。赤いへりの畳は今まで見たことがなく、畳からも特別な場所であることを窺わせる。次に二条城へ行った。二の丸御殿の天井が部屋毎、廊下毎に違う様々な絵が描かれており、上ばかり見上げて歩くこととなった。そして大政奉還が行われた部屋を実際に見て、ここで歴史が大きく動いたのかと思うと感慨深かった。その後は新撰組ゆかりの寺である壬生寺を訪れた。壬生寺には新撰組隊士の墓や、新撰組を歌った歌碑もあった。また絵馬や有志によるノートもあり、新撰組の人気とたくさんのファンがいることを改めて実感した。お参りした後は新撰組初期の屯所として有名な八木邸を訪れ、案内の方のお話を聞いた。案内の方のお話は分かりやすいもので大変勉強になり、聞いている間はとても真剣な気持ちになった。

実際に芹沢鴨らが暗殺された部屋で聞いているので尚更である。だがここでお梅さんの首が飛んだ、と聞いたときは少し鳥肌が立った。八木邸を訪れて、有名な新撰組がここにいたのかと考えると、今まで遠く感じていた歴史上の人物が身近に、この場所で生きていたことを感じる事ができた。お話を聞いた後は隣のお菓子屋でお茶とお餅をいただくことができる。お茶も、屯所餅も大変おいしく頂き満足であった。

今回の日本文化演習では様々な歴史的建造物や国宝、重要文化財を実際に訪れ、見る事ができた。恐らく北海道では数日でここまで多くの歴史的建造物や文化財を見ることはできないだろう。ここに京都と北海道の歴史の違いを感じ、実際に現地へ赴き自分の目で見て体感して得るものの大きさを実感した。そして最も違いを感じたのは気候である。関西の方が気温は高いのだから寒くはないだろうと考えてきたが甘かった。マイナス 10 度の北海道の寒さには耐えられるのに、何故か関西のプラス気温には耐えられないと感じた。今回冬の旅であったこともあり、京都の底冷えを存分に味わったのである。また、余談ではあるが自主研修中に電車に乗ったとき、ここでも北海道との違いを発見した。北海道ではほとんど必ず直されている座席の向きが直されないままで座る、更に窓側の席が空いても詰めて座らない、など同じ日本国内でも大きなものから細かいものまで、文化の違いを感じる旅となった。今回の演習で北海道とは異なる文化や歴史に触れる事ができたが、更に理解を深めるためにまた京都を訪れたいと考えている。



見学した後に頂けるお茶と屯所餅

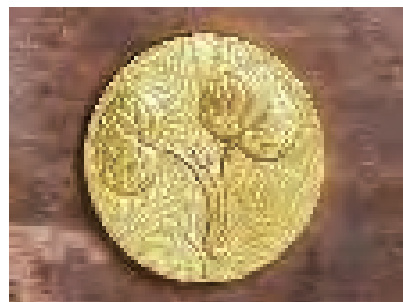
「双葉葵の神紋」と「玉依姫」 —下鴨神社と貴船神社の接点とは—

1 部日本文化学科

2 年 2711147 澤田 範子

自主研修二日目である 2 月 22 日、私は下鴨神社と貴船神社に訪れた。私が旅行前に設定した自主研修のテーマは、「京都の寺社仏閣の由来・伝承を学び、日本の歴史・文学・文化について自分の五感で感じる」というものであったが、下鴨・貴船神社でのある発見により、神社の「神紋」というものに興味が湧いた。

神紋とは、神道の用語の一つで、神社の紋章のことである。簡単に言えば、家紋の神社版である。神紋は、祭神に関する伝承の他、神職や有力な氏子との関わりから生まれたものである。神紋には神社にゆかりのある公家や武家の家紋、由緒縁起にまつわる図案など独自の意匠



が用いられている。

自主研修二日目、私は下鴨神社を散策しお守りを購入した後、貴船神社へと向かった。貴船神社で参拝しようとする、賽銭箱に見覚えのある図が書いてあった。下鴨神社で購入したお守りに刺繍してあった図と同じものが、貴船神社の賽銭箱にも描かれていたのである。この図が「神紋」である。

下鴨・貴船神社の神紋は「双葉葵」というもので、「賀

貴船神社の賽銭箱に描かれた神紋

茂葵」とも呼ばれる植物を紋にしたものである。この双葉葵は賀茂氏の家紋で、この双葉葵について、「昔は『あふひ』と書き『あふ』は『会う』、『ひ』は神様のお力を示す言葉であり、大きな力に巡りあうという意味を植物の『あふひ＝葵』で示していると伝えていきます」と下鴨神社のお守り袋に記載されている。

この紋について更に探ると、賀茂氏の象徴であったこの葵の神紋は、賀茂氏と繋がりが深い三河国の武士団が家紋として用いてきたとされ、三河武士である徳川家が葵紋を使用していることは、徳川家が賀茂氏の末裔ではないか、との説の根拠になっていることを知った。また、双葉葵は名前にも見られるように葉の数は二枚であり、三枚になることは稀であることから、徳川家に見られる三つ葉葵の家紋はある種特別な図案であることがわかった。



下鴨神社のお守りに描かれた神紋



双葉葵の紋



徳川家の三つ葉葵の紋

私は、全く関連性が無いと思っていた二つの神社に、なぜ同じ双葉葵の神紋があるのか疑問に思い、何か接点はないか調べることにした。すると、下鴨

神社と貴船神社に「玉依姫」という人物が関わっていること、また貴船神社が平安時代末期から明治時代まで賀茂別雷神社の摂社とされていたことがわかった。賀茂別雷神社は下鴨神社と対をなす神社であり、二社を合わせて賀茂神社と総称される。よって神紋も同じである。

玉依姫とは、神霊を宿す女性、すなわち巫女の総称を指し、固有名詞ではないとされる。下鴨神社における玉依姫は、賀茂別雷神社の祭神・賀茂別雷命の母であり、玉依姫の父・建角身命と共に祀られている存在である。一方貴船神社の玉依姫は神武天皇の母であり、「黄船」に乗って浪速から淀川、鴨川、貴船川を遡って上陸した場所（今の貴船神社奥宮）に水神を祀った人物とされている。同じ「玉依姫」でも全く別の人物だが、これが神紋と結びつくかはわからなかった。平安時代末期に貴船神社が賀茂別雷神社の摂社であったということは、賀茂別雷神社で祀られている祭神と縁故の深い神が貴船神社にも祀られていたということになる。賀茂別雷命の母である玉依姫と神武天皇の母である玉依姫が同一視されていたのだろうか。しかし貴船神社の祭神は聞おかみ神、高おかみ神であり、玉依姫

は貴船神社の起源に関係するのみの人物で、神として祀られていないのである。平安時代ではこのようなことが混在していたのか、それとも別の意味があったのか考えさせられる。

家紋についての資料は数多くあるものの、神紋について書かれた資料は非常に少なく、インターネットの情報や神社で購入したお守り袋などの記述を頼ることとなった。また、「神紋」という言葉自体が辞書に載っておらず、一般的に認知されていないものであることがわかった。神紋については、まだ検証が不十分であり、もっと研究を深めることが可能なのではないだろうか。

今回の研修旅行で、普段は気付くことのない「神紋」という小さな発見から、幅を広げて考えることができ、新鮮な思いだった。この「神紋」一つ取っても、日本の神話や伝説、歴史に触れることができた。自分の目で見て気になった物事を調べることは、講義を受けているだけでは体験できないものである。次に関西へ行くことがあれば、また違う発見があるのではないかと楽しみである。

<参考資料>

- ・『大辞泉』、1998 年、小学館
- ・『百科事典マイペディア 電子辞書版』、2008 年、日立システムアンドサービス
- ・『ブリタニカ国際百科事典 小項目電子辞書版』、2009 年、Britannica
- ・岡山県神社庁 <http://www.okayama-jinjacho.or.jp/index.html>
- ・家紋 Word <http://www.harimaya.com/kamon/>
- ・Wikipedia『家紋』 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%B6%E7%B4%8B>
- ・貴船神社 <http://kibune.jp/jinja/index.html>
- ・神社の看板やパンフレット、お守り袋の説明書など

冬の古都を巡る

1 部 日本文化学科

2 年 2711152 杉山 麻衣

2 月 20 日から 25 日までの 5 日間の研修旅行は奈良・石舞台古墳見学から始まり、奈良大学での講義や多くの寺社仏閣を訪れ、大阪・道頓堀付近の散策で終わるという様々な場所を訪れ、その土地に根付いた文化に触れるという大変有意義で興味の尽きないものとなった。

今回の研修旅行での私のテーマは『冬の古都を巡る』というものだった。なので、2 日間の自主研修は自分が訪れたいと思った場所に行くために 1 人での行動が主であった。今まで見知らぬ土地を 1 人で行動するというのをしたことがなかったので、不安はあった

がそれ以上に「1人で巡る」ということに楽しみを感じていたのはいうまでもない。

私が2日間で訪れた場所は、1日目は千本鳥居が有名な伏見稲荷神社、有名な観光地である清水寺とその界限。そして、祇園商店街である。2日目は1日目に予定していた真正極楽寺に祇園さんと呼ばれる八坂神社と大きな鳥居が目立つ平安神宮に安陪晴明の居があった場所に造られた晴明神社、かねてより訪れてみたかった京都御所である。

1日目の天気は最初は曇り空だったが途中から晴れ始め、気温も北海道に比べると軽く肌寒いと感じる程度だったので自主研修の妨げになることはなかった。伏見稲荷へと行くと、最初に本殿をお参りしたのちに千本鳥居をくぐり、更に奥へと進む。やはり、山の中にいるせいか街中にいるよりも空気が冷たく、澄んでいるような気がした。稲荷山の頂上へと続く道には多くの鳥居が並んでおり、古いものもあり、中には明治期に造られたものや石造りの鳥居もあった。道すがら見た限りではあまりにも傷んでいるものは取り外されたようである。上部の写真は



山頂へ行った帰りに新たに鳥居を造っている光景を写したものである。そして、登っている最中の話なのだが、その時私は一人で頂上へと登っており、周りには誰もいなかった。



そのせいか稲荷山に登っているのは自分一人しかいないのでは、という錯覚に襲われるほど静かで人の気配がなかった。その後、私は2、3時間ほどいた伏見稲荷からそのまま清水寺とその界限へと足を延ばした。その道すがら、匂いに惹かれみたらし団子を購入した。

硬すぎず柔すぎずの丁度いいもので団子もたれもとても美味しかった。緑茶があれば更に美味しく感じたのではないかと今も考えている。辿りついた清水寺は改修工事の最中で朝倉堂や釈迦堂を見ることが叶わなかった。右の写真は釈迦堂、阿弥陀堂方面から撮影したものである。本殿は釘が見えないように造る【舞台造り】で造られていた。写真を見て分かるように観光客が大勢訪れており、四季を通じて清水寺とその界限は観光客に人気であると認識した。そして、清水寺のある音羽山は稲荷山同様、花の蕾はあれど未だ小さく開く気配はなかった。おそらく、今頃の時期になれば梅が咲いているのだろうと考える。



2日目は京都御所から、私の冬の古都巡りは始まった。御所が存在する御苑は広大な公園となっており、市民の日常と共に存在するものであった。御所内は係員の案内で巡ることとなり、係員の説明を聞きながら御所内を巡るのはとても楽しかったが、入れない場所や立ち入り禁止の場所が多く残念に思えるほど、興味のを引くものがたくさんあった。参観コース外だったため、見ることは叶わなかったが『源氏

物語』に登場した飛香舎や藤壺があることを地図で確認した。係員の案内で承明門や清涼殿巡ったあと、何もない広い空地で足を止めた。係員の説明曰く、元々は御所の厨などがあった場所だったが、第二次世界大戦時に空襲が襲ってきたとき全焼を防ぐために渡殿や橋が外され、厨などは壊したという。戦後には橋などは架け直されたいが厨一帯は再建されなかった、ということである。御所を出た後は当初の予定には入れてなかった八坂神社や錦市場、平安神宮。そして、安陪清明関連の真正極楽寺や清明神社を巡った。

今回の自主研修では北海道ではそう多く見ることができない寺社仏閣の改修工事や鳥居の新設、京都御所参観など貴重な体験を多く、自分の視野が広がるという有意義なものとなった。これらのことが今後自分の考え方や興味を広げるものであると信じたい。そして、研修旅行全体としても訪れたことのない場所を巡り、学ぶことで新たな発見や改めて認識させられることがあり、好奇心を掻かれる研修となった。



京都の寺社を歩く

1 部日本文化学科

2 年 2711156 高橋 尚子

今回、6 日間の日本文化演習に参加し、北海道では感じることはできない京都・奈良の文化、特に神社・お寺を中心に自身の足で歩いて直に触れることができた。見慣れた北海道の雪景色から離れ、訪れた 2 月の京都は晴れた日はとても過ごしやすい気候であったが、雨や雪が降ると身に染みる寒さで、特に神社やお寺の中は外より寒いのではないかというほどであった。



団体研修で私が最も心に残っているのは彦根城の散策である。彦根城はあいにくの悪天候で、水交じりの雪が降り積もっていたが、雪で彩られた天守とその周りにある木々はとても綺麗でこの季節でしか見ることのできないものだの実感した。また、元禄時代に建てられ常に十数頭の藩主用の馬が繋がれていた馬屋があるのだが、この馬屋は、全国の近世城郭に残る大規模な馬屋としてほかに例がなく、国の重要文化財に指定されているものである。ここには 21 頭もの馬を収容できその時の目的に応じてどの馬に乗るかを決めていたという。また、これほどの馬がいると管理する者が

必要であり、実際、馬役という馬の日常的な管理・調教を行うとともに、藩主やその子弟、藩士に馬術を指南する役職があったと知り、とても驚愕した。

自主研修では1回目に金閣寺・龍安寺・仁和寺などへ向い、2回目に西本願寺・東寺・東福寺・伏見稲荷大社などを散策した。その中でも印象に残っているのは伏見稲荷大社である。ここは全国に3万社あるといわれる稲荷神社の総本宮であり、観光ガイドやテレビでも取り上げられる京都の名所とされている場所だ。私自身、事前に写真を目にしていたが、実際に目で見ると全く違うものであった。特に千本鳥居は中を通ると視界が朱一色に染まり、とても神秘的な空間であり、実際に訪れないと感じることのできない迫力があると感じた。また山の参道全体に数えきれないほどの鳥居が並んでおり、その光景は圧巻であった。願い事が「通る」あるいは「通った」御礼の意味から、鳥居を奉納する習慣が江戸時代以降に広がったため伏見稲荷大社には多くの鳥居があり、現在まで続いている日本の歴史を感じることができた。



自主研修では寺社を中心に歩いて散策したのだが、我々が住む札幌に比べて京都には寺社が街中に多くあると感じた。私はこれまで日常生活とは別に切り離して特別なものとして神道や仏教をとらえていたが、京都の人々には当たり前のものとして生活に根付いているのではないか。



このような京都の文化を自分の足で訪れ、目で見ても肌で感じることもできた研修であった。また、北海道を離れ別の文化に触れることで、北海道の良さや文化を再発見する良い機会にもなったように思う。この演習では有意義な時間を過ごすことができたが、あっという間に6日間が過ぎたように感じた。今回得た知識を今後に活かし、また2日では回りきれなかった場所をまたの機会に訪れ自分の知識をより深めていきたい。

研修旅行での体験

1 部日本文化学科

2 年 2711157 竹内 元輝

私たちは今回の研修旅行で、近畿地方を訪れた。全体研修やそれぞれの自主研修で、様々な地域や建造物を見に行き、自分たちの目で、耳で、手で、普段はなかなか体験することが難しいものを体験することができた。ここでは、今回の研修旅行で私が感じたことを述べていこうと思う。



まず初めに、三十三間堂での発見だ。この三十三間堂には、千体千手観音像や風神・雷神像、二十八部衆像などと言った国宝や重要文化財が多数安置されている。実際にこれらの仏像を見るのは初めてであり、私は、あまりの迫力に言葉を失ったのを覚えている。千体千手観音像は、それぞれの像の作り手が違うため、一つ一つの表

情が異なっており、自分と同じ顔の像もいると伝えられているほどである。

次に、興福寺の国宝館だ。ここには、本尊千手観音菩薩像を中心に、乾漆八部衆像や十大弟子像、板彫十二神将像、木造金剛力士像、銅像仏頭などの国宝や、木造阿弥陀如来像や木造薬師如来像、梵天像、帝釈天像などの重要文化財が安置されている。この興福寺で真っ先に思いつくことは、やはり阿修羅像だろう。天平彫刻の傑作として知られている阿修羅像を間近で見ることができたのは、大変貴重な体験であった。また千手観音菩薩像や木造阿弥陀如来像などは、かなりの大きさであり、これもまた魅了させられた。



また、京都を訪れた時に、仁和寺や龍安寺、東山慈照寺などいくつかの寺院を訪れた。私はいつも、寺院を想像するとき、御堂が一つしかなく、かなり小さいものを想像してしまうため、日本の歴史を学ぶとき、寺院が土地を持っていることのイメージがしにくかった。しかし、今回、実際に訪れて、寺院の広大さに圧倒されてしまった。また、東山慈照寺や龍安寺などは、東求堂や石庭など

といった有名な寺院の一部分しか今まで知らなかったが、実際にこの目で見学してみると、それ以外の部分にも様々な特徴があることを認識させられた。仁和寺の御殿から見た南庭では白川砂を敷き詰めた簡素な美に趣を感じ、東山慈照寺の展望所から眺める景色は歴史に思いをはせながら見ることができ、龍安寺の鏡容池を回る道は心が和む道である。

私たちの地元、北海道から、京都や奈良などにある仏像や寺院などの建造物は写真などの史料から想像するしか方法がないため、イメージをするのがかなり難しかった。しかし、今回の研修旅行で、実際に建造物を見学したことで、それらのイメージを持つことができ、とても貴重な体験であった。また、自分の目や耳など、五感で体験したことで、新たな発見やさらなる文化への興味を持つことができた。そのため、この、5泊6日の研修旅行は貴重な時間であり、今後の研究につなげていこうと思う。



「京都」歴史と文化の街 － 五感で感じる古都 －

1 部 日本文化学科

2 年 2711164 富田 侑葵子

今回参加させていただいた五泊六日の日本文化演習では、普段は出来ない新鮮な体験を「日本文化」を焦点にしながら行え、また強く感じる事が出来るものだった。特に二日用意されていた自主研修では、食や衣服、寺社仏閣等を見聴きし触れる事で五感すべてを使い様々な経験が出来た。故にここからはその二日間について述べていきたい。

先ず自主研修一日目は「清水の舞台から飛び降りる」という言葉で有名な清水寺に向かった。古いお寺でありながら観光客も多い清水寺では「清水の舞台」や「音羽の瀧」、暗闇をお釈迦様の胎内に見立てて巡る「胎内めぐり」等魅力的な体験の出来る場所が多くある。音羽の瀧では上から流れ落ちる三条の水に中は利得、右は智慧、左は慈悲という意味合いがあると言う。実際に行ってみたが柄杓は少し重めで四メートル上から流れる水を受けるのは少々大変であった。また柄杓の返却の際は紫外線滅菌装置を使用する事になっており衛生面も考慮する観光名所たる気配りを感じた。

清水寺は『源氏物語』や『枕草子』等多くの物語に登場しており、それらには今と変わらず多くの参詣者がいた事を示している。私は清水寺に貸し着物を着ながら参詣したのだが、動きの制限される着物で長い階段を上り下りするのは中々骨が折れ、昔の人々もこのような思いをしたのだろうか考えると感慨深いものがあった。

清水寺を下り二寧坂を上った先には、ゆどうふや湯葉を提供する「奥丹」という店があり、そこに併設されたまんじゅう売り場で「とうふまんじゅう」を頂いた。お茶とセットで二百円でお店の前の椅子に腰かけて頂く。もっちりとした皮とおからと野菜の優しい甘みを感じながら坂を行き来する人々を眺める。これらの食べ処はいたる所に点在しており、傾斜のある坂の途中での貴重な休憩場になっていた。

二日目は世界遺産でもある「賀茂御祖神社」（下鴨神社）の参詣からスタートした。下鴨神社本堂は時間の関係で入れなかったが、京都で元祖のみたらし団子屋「加茂みたらし茶屋」でみたらし団子を注文する事が出来た。このお店のみたらし団子の形状は変わっていて小粒の団子が五つ串に刺さっており、最後の団子のみ他の団子と間をあけて串の先端に収まっているのだ。この形状は人形を模したものであり先端の団子が頭でその後につながる四つの



団子が手足を意味するらしい。このように何気ないものにも意味があるというのは歴史のある町らしい事だと感じた。味は黒蜜餡がかかっているので予想以上に甘かったけれど団子の持つお米の味がさっぱりとしてとても気持ち良い味であった。また、焼きたての団子らしく香ばしい香りがとても新鮮だった。

次に向かったのは「貴船神社」である。貴船神社は絵馬発祥の地とされ小説『陰陽師』でも登場した場所である。また和泉式部も訪れたといわれ、本宮から少し歩いた所にある中宮には歌碑も残されていた。貴船神社は市内から外れ森林の中にあり、静謐な空気に満たされており涼やかな空気と共に不思議と心身をリフレッシュ出来る場所であった。そして、水の神様を祀っているため、霊泉に浮かべて吉凶を占う水占いや水守り、澄んだ音のする開運鈴等貴船神社特有の物が多く充実しており興味深く面白かった。

そして、一番印象に残っているのが「鹿苑寺」（金閣寺）である。私にとって「金閣寺」と言えば三島由紀夫の『金閣寺』の印象が強く、さぞや美しく荘厳な建物なのだろうと思っていた。しかし実際に見るかの有名な金閣（舍利殿）は予想以上に幽艶な美しさを誇っていた。金箔を重ねた金閣は迫力があり、更に金閣を水面に映す鏡湖地には名石が配されており、室町時代の代表的な池泉回遊式庭園を見事に体現していた。私はこれまで庭園を楽しむという感覚を押し並べて感じた事がなかったが、金閣を見て四方八方から見ても美しいと言わざるおえない計算された美を初めて感じる事となり、とても感動し印象に残ったのであった。

他にも千本鳥居の「伏見稲荷大社」や南北朝時代に描かれた仏画『八相涅槃図』を鑑賞した「高台寺」等自由研修で巡った場所はどれも素晴らしく心に残るものだった。

今回の研修旅行では様々な物を見て、聞いて、実際に体験することが出来た。巡った関西の中でも殊に京都という街は、古の歴史と文化を如実に表しながらも交通機関の整備や建物の修復にも積極的でこれまで考えていた古都のイメージを良い方向に破壊してくれた。また、京都の人は自尊心が強く冷たいと勝手に思っていたが実際は、地図を広げていれば声をかけて



くれ、果てはトイレの清掃のおじさんまで気軽に世間話をしてくれた。そのため京都と言う街は観光客が多いためか外部の者に対して懐が深く、コミュニケーションを厭わない温かい人が多いと感じた。私はこのような今と古を繋ぐ様々な経験によって「日本文化」を新たな気持ちで感じる事ができたのであった。私はこれらの経験をこれからの学問研究に生かしていきたいと考えている。

京都の寺院の美しさについて

1 部 日本文化学科

2 年 2711172 那須 哲朗

本レポートでは日本文化演習の内の 2 月 20 日、22 日の自主研修の内容に基づき京都の

美について考察する。

事前レポートでは小説の情景描写から京都の美を考察することが記されていたが、自主研修の時間の都合上実際に行くことができた寺に限られたので、本レポートでは京都の寺院に見られる美しさをテーマとして進めるものとする。

実際に訪れたお寺

・龍安寺、仁和寺、妙心寺

龍安寺

龍安寺は京都市の右京区にある臨済宗妙心寺派の寺院であり石庭で知られる。本尊は釈迦如来を祀っており、創立者は細川勝元、初代の住職にあたるのは義天玄承である。「古都京都の文化財」として世界遺産に登録されている。

龍安寺の特徴は何と言ってもその石庭である。幅 22 メートル、奥行 10 メートルほどの敷地に白砂を敷き詰め、帯目を付け、15 個の石を一見無造作に 5 か所、点在させたきわめてシンプルな庭となっている。枯山水の庭の代表的なものとしてよく知られている。

私は事前知識として枯山水の特徴は水を使わずして水を感じさせることであると言えるが、実際にその庭園を訪れてみるとパッと見た感じだと地味で質素な印象を受けた。しかしながら、よくよく見れば見るほどその石庭は静かな静寂をその空間一帯に広げ、「シーンとした」雰囲気演出しているのだと私は感じた。直接的には訴えてはいないが、その場に広がる空気を感じないと触れることのできない奥ゆかしさのようなものを私は感じた。

仁和寺

高校の古典の教科書、徒然草第 5 2 段に登場する「仁和寺のある法師」の話でなじみ深い仁和寺であるが、仁和寺は皇室とゆかりの深い門跡寺院で、宇多法皇が住まわれたことから「御室御所」と称されることもある。そして仁和寺の御所跡が、国の史跡に指定されている。

建物は荘厳で、古くからの木造建築特有のにおいと廊下や柱が弾力を持ってきしみ音がするのが何とも歴史を感じさせ、日本の木造建築の心地よさがあると私は感じた。

妙心寺

妙心寺は、京都の右京区にある臨済宗妙心寺派大本山のお寺である。創立者は花園天皇で初代住職は関山慧玄としている。

特徴としては日本にある臨済宗寺院約 6,000 か寺のうち、約 3,500 か寺を妙心寺派で占める妙心寺派の総本山である。近世に再建された三門、仏殿、法堂などの中心的な建物の周囲には多くの塔頭が建ち並び、一大寺院群を形成している。平安京範囲内で北西の 12 町を占め自然も多いため、京都市民からは西の御所と呼ばれ親しまれている。

訪れた感想としては寺院にも関わらず赤塗の門が印象的であり、より荘厳で偉大な雰囲気が感じられた。桂春院の回廊は、仁和寺のそれと比べると広く、ゆったりとしていて全体的に伸びやかであり、洗練された空気が印象的であった。

今回の自主研修では考察対象ではない神社なども訪れ時間を割いてしまったことは多少

悔やまれるが、日本古くから存在しつづけている建物の息吹を実際に見て、感じる事ができたのは貴重な体験であったと私は感じた。

京都の風景という「画」

—大原三千院・南禅寺水路閣を通して—

1 部 日本文化学科

2 年 2711174 根布 大地

2 月 18 日から 23 日の六日間に行われた日本文化演習で私は普段北海道で感じる事の出来ない日本の文化を五感で直接体験した。団体研修では奈良・飛鳥寺や比叡山延暦寺、大阪国立民族博物館など京都や大阪の中心から少し離れたところにある個人で一度に訪れるには難しいコースを旅行の行程に組んであり大変貴重な時間を過ごせた。また自主研修では京都大原三千院と南禅寺を中心に見学し、京都の街並みもゆっくりと見て回った。

自主研修一日目、主に見て回ったのが大原三千院だ。京都市左京区にあり、京都駅から大原行きのバスで大体一時間。長い道のりではあるがバスから見えるその景色は目まぐるしく変わり見る人を飽きさせない。京都駅から四条河原町の中心街を通って鴨川沿いから大原へ向かう。近代的なビルの立ち並ぶ観光都市としての景色から昔ながらの瓦屋根の家がポツポツと立ち並ぶ景色に段々と変わっていく。バスに乗って 40 分くらいもすればそこは山の麓。近代的な建物はほとんどない。どの家も昔からの形を保っており、その景色は観光客にもなんとなくノスタルジーを感じさせる。大原の景色は京都駅付近の景色と比べると同じ京都市なのかと疑ってしまうくらいの片田舎だ。周りは見渡す限りの山、畑である。



大原バスセンター前の交差点を渡り、恋愛相談の出来るおじさんの五平餅屋を通り過ぎて約 300 メートル。そこには三千院門跡の碑がある。そこを曲がって砂利道を少し歩いて階段を登れば三千院だ。

三千院の御殿門をくぐって境内に一步入ると大原の中でも異質な光景を目の当たりにする。境内は静寂に包まれている。その世界を象徴しているのが往生極楽院。こけら葺の質素なつくりである。高い杉は境内の厳肅な雰囲気を一相高め、荘厳な仏像や苔の中から顔を出すわらべ地蔵などが神秘的な空間を演出している。三千院の庭はまさに京都らしい風雅な光景である。豊かな緑がとても美しい。紅葉やアジサイの季節に行けばもっと美しい景色が見られただろう。今回三千院の紅葉を見ることができな

いのは残念ではあったが、シーズンでなかったためにほぼ貸し切り状態で本当に静寂に包まれながらゆっくりと見学することができた。また降っていた雪が三千院含め大原の景色をより美しく見せていたのも間違いない。北海道を出ても降る雪を気持ちよく味わうことができたのは三千院の景色があったからだ。

自主研修二日目は南禅寺の水路閣を目的として見て回った。南禅寺の水路閣は境内の光景に突如エキゾチックなレンガ造りが立ちはだかる、まさしくそんな建造であった。南禅寺水路閣は第三代京都府知事の北垣国道氏が首都機能移転後の京都を復興させようと維新以来の京都府政の宿願だった琵琶湖疎水計画を実行に移した際に施工された水路橋で、延長 93.17 メートル、幅 4.06 メートル、水路幅 2.42 メートルの煉瓦造でアーチ構造のデザインである。京都を代表する景観の一つで毎秒 2 トンの水が流れている。西欧技術が導入されて間もない時代、日本人のみの手で設計、施工され、日本の土木技術の歴史の中でも極めて貴重な存在である。昭和 58 年 7 月 1 日に「疏水運河のうち水路閣及びインクライン」として京都市指定史跡に指定された。



京都の風景というものは風雅でノスタルジーを感じさせるような日本古来の景色ばかりかと思えば水路閣のように西欧の文化が混ざったような景色も時代に溶け込み京都らしさを演出している。庭園や仏像、瓦屋根だけが京都の歴史を表しているのではなく、レンガ造りや近代的なビルなども京都の歴史を背負っている。古い景観だけが京都らしいとは限らない。そこに建物が建つにはそれなりの文化と歴史の重みがある。京都は自文化を守るだけでなく上手に外国の文化も織り交ぜて景観を守っているのである。また機会があるのなら今回とは違う季節に再び京都を訪れたい。

歴史的建造物の価値

1 部日本文化学科

2 年 2711175 能戸 和

日本は再建の歴史を歩んできた。

現存する古代・中世期の歴史的建造物のほとんどは、創設当時のものではない。長い年月の間に火災や兵火に見舞われ、貴重な文化遺産の多くは既に焼失してしまっている。蘇我馬子によって推古 4 年に建立された我が国最初の寺院である奈良の飛鳥寺も、旧伽藍は仁和 3 年と建久 7 年の火災により焼失してしまい、現在の伽藍は江戸時代の寛永 9 年と文政 9 年に再建されたものと言われている。また天台宗の開祖であり、幕府や朝廷の政治的権力が脅かされるほどに日本仏教の権威を高めた存在である最澄が、延暦 4 年に建立した

滋賀の比叡山延暦寺の伽藍も、元亀 2 年に織田信長の焼き討ちに遭い、現在の伽藍は後に豊臣秀吉、徳川家康の援助で再建されたものである。京都五山の第一位であり足利尊氏が後醍醐天皇の追善供養のために建立させたとされる天龍寺も、幾度となく火災で焼失し、明治期に再建されている。以上のように、世界遺産に登録されている建造物も含め、歴史的建造物の多くは途中で焼失し、その後再建を繰り返している。私はこの事実を知ったとき、何故そこまでして人々がこれらの寺院を後世まで残そうとしたのか疑問でならなかった。市聖の名で知られる称名念仏の祖・空也上人によって建立された西光寺（現在の六波羅蜜寺）も前述の寺院諸々と同様に何度も火災に遭い、その度に修復されてきた。修復に携わった人物は源頼朝、足利義詮、豊臣秀吉などである。私は実際に六波羅蜜寺に足を運び、原点である空也上人の業績を調べることで、前に述べた再建の疑問に対する自分なりの答えを導き出した。

空也上人が生まれた時代はちょうど都が平安京に移り、人口が集中し始めたことで疫病や盗賊、災害が多発していた頃であった。大宰府に左遷された菅原道真の怨念が噂されていた時期でもあり、民衆たちは不安な日々を送っていたようだ。当時仏教は皇族や貴族など権力のある者たちが中心となり信仰されていたが、空也上人は世情に翻弄される力なき民衆たちこそ仏によって救済されるべきだと考え、身分の低い者や貧しい者にも簡単に実行できる称名念仏を世に広めたのである。鎌倉彫刻の大成者・運慶の四男である康勝によって手掛けられた空也上人立像は、空也上人の行脚の様子を表している。頬は痩せこけ鎖骨がくっきりと浮かび上がった貧相な姿をしているが、薄目から水晶の瞳を覗かせたその表情は安らかで、眼差しは温かみに満ちている。「南無阿弥陀仏」を阿弥陀仏の形で具現化させた表現は面白いと感じていたが、そもそも何故そんな型破りな表現法を使ったのか、それを考えると、康勝が生前の空也上人の姿をどのような形で残そうとしたのかが想像できる。空也上人は各国を歩き回り、民衆に触れ合いながら仏の教えを広めた「動き回る僧侶」であった。康勝はそんな空也上人の活動や人柄を後世の人々に伝えるため、はたまた仏教に携わる人々にとっての模範・象徴となつてほしいという願いのために、出来る限りの技巧を凝らし、念仏という形のない言葉にさえ実体を持たせ、この傑作を完成させたのだろう。空也上人が後の仏教世界や世俗に与えた影響は大きい。自分に関する資料をほとんど残さなかった空也上人本人に代わって、彼の偉業を伝える役目をこの仏像と六波羅蜜寺は担っているのだろうと考えられる。織田信長によって仏教勢力が下火になり、外国人宣教師によるキリスト教化が進むことを恐れた豊臣秀吉が、日本の仏教を再興させる目的であらゆる寺院の再建事業に取り組んでいたと推測すると、六波羅蜜寺を維持し続けようとした理由は、一遍上人の踊念仏や法然による専修念仏など、仏教が民衆に広まった浄土信仰の原点が、空也上人の称名念仏による行脚であったからなのではないだろうか。

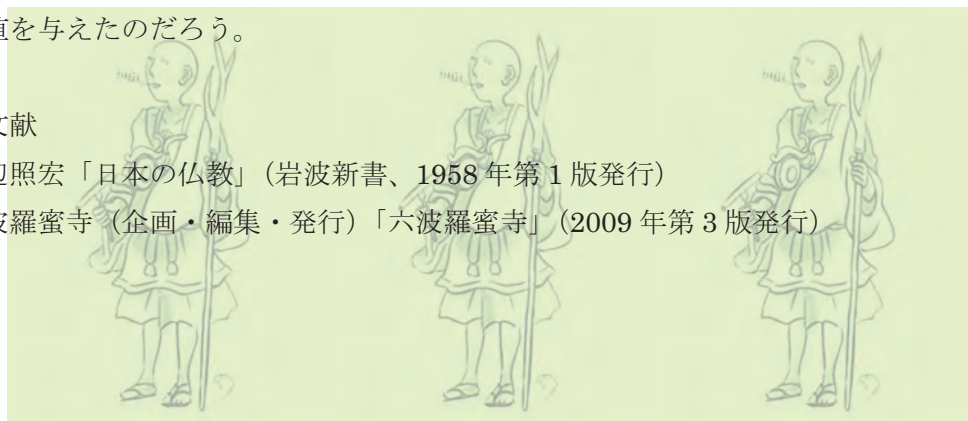
千本鳥居で有名な、全国に 3 万社あるといわれる稲荷神社の総本宮・伏見稲荷大社や、参道に並ぶ 1786 基石灯籠及び回廊に吊るされた 1329 基の釣灯籠が見事な奈良の春日大社など、神道関連の建造物も乱世の時代に戦火に遭い焼失した歴史があるが、やはり再建さ

れている。下鴨神社の名称で知られる賀茂御祖神社は、平安京以前の原生林の植生を伝える貴重な自然林である糺の森も含め平成 6 年に世界文化遺産に指定されている。加えてこれらの神社には絵馬などの願掛けや厳粛で幻想的な年間行事があり、現在でもその風習は廃れていない。その美しい景観も相まって、人々の心からこれらの神社仏閣の存在が消えることはあり得ないようにも思える。飛鳥寺、比叡山延暦寺、天龍寺、そして六波羅蜜寺も全て、人々の信仰を支える歴史や想像を絶する美しい景観があった。先人たちがこれらの建造物を後の世に残そうと躍起になり、当時の技術で再建を繰り返したこの事実こそが、歴史的建造物の歴史性の厚みを言外に伝えていると解釈する。

北海道に住む私にとって、世界遺産や国の重要文化財など歴史的建造物に触れる機会は極端に少ない。したがってこの研修旅行で見たもの、感じたものは大変に新鮮であり貴重なものであったと実感している。歴史的建造物は多くの人の手によって再建され、人々の思いが募ることで新たな歴史を刻んでいくのだ。時の権力者や名のある仏師、そして民衆たちの手によって過去の信仰は継ぎ接ぎされながらも語り伝えられ、歴史的建造物に更なる価値を与えたのだろう。

参考文献

- ・ 渡辺照宏「日本の仏教」(岩波新書、1958 年第 1 版発行)
- ・ 六波羅蜜寺 (企画・編集・発行)「六波羅蜜寺」(2009 年第 3 版発行)



寺社・仏閣を巡る旅を終えて ～時代と自然を感じる事ができたか～

1 部日本文化学科

2 年 2711183 藤田 晏生

私は今回の研修旅行で一つ、細かく分けて二つ、大きな目的を掲げていた。それは、「時代」と「自然」、これらを感じる事だ。あいまいにしてとらえづらい目的だったため、ともに旅行に行った友人たちは「そのような目的で、何か得られるのだろうか」と思っていただろう。しかし、この目的のおかげで、いろいろな場所を様々な視点で見ることができたのだ。

率直に言おう。研修旅行に行く前に提出した計画書に書かれていたとおりに、実際の旅

は全くいかなかった。全くというのは少々言いすぎたが、大きく変化することとなったのは確かである。全体的に時間がおしてしまったのが大きな理由である。しかし逆に言ってしまうと、そのおかげで一か所一か所回る時間が増えたというのも事実である。計画とは、さらに言えば旅の計画というものは、その通りに行かないことがほとんどである。このような変化も旅の一興と考えて、私は旅を楽しんできた。

実際に行けた場所をあげるとこうなる。一日目は、清水寺、高台寺、八坂神社、錦市場の四か所。二日目は、下鴨神社、貴船神社、渡月橋の三か所である。辺りを散策した、ちらりと覗いたなどの程度のところも含めればもう少しあるのだが、きちんと自分たちが行ったところをあげるとこの計七か所になる。

次に行けた場所についての感想を述べていきたいと思う。

まずは一日目の場所についてである。清水寺は着物を着てお参りすることができた。清水坂にある店で借りることができたのだ。着物を着て清水坂を上り清水寺を参拝するというのは結構体力を必要するものであったが、歴史的建造物の中に自分が溶け込んでいるようで何とも言えない優越感に浸れた。印象的だったのが「胎内巡り」というもの。胎内に見立てた真っ暗な道を手すりを頼りに進み、道の中心に位置する明るくなったところの丸い“へそ”のようなものに祈願するというものなのだが、道は本当に真っ暗ですぐ近くにいる人や自分の体さえまったく見えないという状況で進まねばならないので、まるでアトラクションを体験しているような気分になった。着物を返却し、産寧坂・二年坂を散策した後高台寺へ向かうこととなった。豊臣秀吉の妻・ねねの建造した寺である高台寺は、秀吉を思い起こさせるような建造物がちらちらと見えた。何よりも驚いたのが、夫妻よりその関係者の像のほうが大きかったことである。そのように見えたかもしれないが、それらの像のほうが目立っていたことは確かであった。その後錦市場に向かったのだが、私の期待が大きすぎたのか実際にそうだったからか、予想とは全く違う場所であった。祇園の町にある買い物のできるところ、という華やかな雰囲気、生活的な雰囲気、両方が想像できると思うが、私の予想は前者、対して現実は後者であった。勝手ながら少し残念に思った。

次に二日目の場所についてである。下鴨神社は行った時間が早かったこともあり、すべての場所には入れなかった。しかし干支をつかさどる神様を参ることができたり、何よりみたらし団子発祥の地で元祖みたらし団子を食べることができたのでとてもよかった。だんご一粒一粒は小さく、五つつながったものが三本で一組であった。香ばしくてとてもおいしかったので、機会があればまた食べに行きたいものである。その後交通機関の時間に追われながら貴船神社に向かった。貴船神社は私が一番期待していた場所でもあるので、ここは折角なので最初に述べた目的にも触れながら感想を言おう。ここで一番印象に残ったのは、入り口に当たる道である。行く前から写真を見て美しいと思っていた木々と灯籠の並ぶ道、しかし今の時期ではそのような配色は楽しめないと思っていたが、私は自然をなめていたようである。そこに生えていた木々は葉を落としておらず、それに加えて山とい

うこともあり雪が見えていた。つまり実際のその道には、数十もの灯籠の赤、生い茂る木々の緑、飾り付けたかのような雪の白、三色がそろうという期待を超えた光景が広がっていたのであった。これを見ただけでもこの旅に来たかいがあったというものだ。山道を登って本殿に参拝した後、金閣寺の景観を少し眺め、すぐ最後の目的地・嵐山へと向かった。迷ったこともあって、たどり着いた時にはあたりは暗くなり始め、店は閉まっているものも多かった。しかし、渡月橋から見た景色は北海道にも勝るとも劣らない美しい自然あふれるものであった。特に渡月橋の下を流れる大堰川はとても澄んでいて、夏であれば遊びたかったと思うほどであった。竹林の道にも行こうと思っていたのだが、そこにたどり着いた時にはあたりは真っ暗だったので機会があれば挑もうと心に決めこの地を後にした。

行けた場所は案外少なかったがその分ゆっくり見ることが可能であった。計画通りに進んでいたら、逆に物足りなく思っていたかもしれない。しかし、私はこの旅で満足できたわけではない。「また行きたい」、「今度はここを改善してよりよい旅に」、そう思わせる旅となったのだ。

琵琶湖疏水を歩く

1 部日本文化学科

2 年 2711187 松井 洋平

今回参加した日本文化演習・関西研修旅行では、飛鳥寺や平城宮跡、比叡山・延暦寺などといった日本全国どの地域の人でも名前くらいは絶対に聞いたことあるような有名な場所を見学して、日本の歴史の流れを肌で感じる事ができた有意義な旅行であった。この6日間という長い旅の中で一番心に残ったものは、やはり自主研修の時間である。中でも5日目の自主研修で見たものは最も感動した光景であった。

この日私は友人と2人で銀閣寺に行く予定を事前に立てており、当初は銀閣寺をスタートとして哲学の道を南下、南禅寺を見学した後大阪へといったような計画を立てていた。しかし、前日に調整した結果、南禅寺から哲学の道を北上し、銀閣寺へというルートで最終決定した。

当日、宿泊先を出た我々は時間に余裕もあったため徒歩で南禅寺に向かった。南禅寺の参道に到着した我々だったが、ずっと歩き通しだったため参道にあったお菓子屋さんで休憩することにした。ここでは八つ橋シュークリームなるユニークなものが売られていたので試しに1つずつ購入し食べてみた。シュー皮のサクサクと生八つ橋のもちもちが未知の食感を生み出し、シュークリームの常識がぶち壊された。味は抹茶とバニラの2種類、訪れた際には1度お試しください。





一服を終えた2人は門を潜り、境内へ。ここ南禅寺では友人が見たいと言っていた水路閣を見に行くことにした。水路閣というのは琵琶湖疏水が流れる水道橋のことで、煉瓦造りでアーチ構造の西洋風デザインはお寺の境内にありながら堂々と佇んでいた。せせらぎに包まれながらこの水路閣を観察していると階段があったのだ。その階段は水道橋の上へと続いており、我々は水道橋の上で流れる琵琶湖疏水をこの目で見る事ができたのだ。そこから南禅院方向には進めないようであったがもう片側には進めるようになっており、琵琶湖疏水を真横に散策を始めた我々は発電施設に行きついた。後の調べでここは蹴上発電所の関連施設のようで、この蹴上発電所というのはなんと日本初の事業用水力発電所なのだそうだ。施設のあたりは開けていて、広場のようなものがあつた。そこには銅像と石碑が立っており、銅像の方は「田辺朔郎」という方らしい。田辺朔郎さんという方はこの琵琶湖疏水と蹴上発電所の建設に従事した方らしい。また後の調べでわかったことだが、この田辺朔郎さんは北海道官設鉄道の鉄道敷設部長を務めた方で狩勝峠の名付け親なのだそうだ。石碑の方は「殉職者之碑」と書かれており、琵琶湖疏水工事の際に命を落としてしまった方たちへの慰霊碑らしい。ここにはインクラインの跡がそのまま残されているなど非常に珍しい光景がたくさんあるため、初めての感動を味わうことができた。



水路閣を後にし、南禅寺の境内へと戻った我々は次に哲学の道を目指した。道中には禅林寺などまた多くのお寺が立ち並んでいた。哲学の道というのも琵琶湖疏水の流れる河原道であり、哲学の道に入った我々は間もなく猫の置物を見つけた。それに囲まれた看板には「憩いの喫茶店、若王子」の文字。いかにもいい雰囲気のお店だが生憎定休日らしく中で一服することは叶わなかった。がっかりして話していると置物だと思っていた猫が突然動き出したのだ。しかも全部が本物の猫だったらしい。これには正直驚いた。人なれしている猫ばかりでこちらによって来て愛嬌を振りまいていた。機会があればひ喫茶店があいているときにまたお邪魔したい。哲学の道ではその他さまざまなお店に寄り道をしてふらりふらりと歩いて行くと漸く銀閣寺の参道へ。

銀閣寺の参道は清水寺の参道ほどではないもののとても賑わっていた。銀閣寺の門の目の前にあるお店「まつばや」でまた休憩。ここでは生地と玄米を使ったシュークリームがあつたので早速購入。食べてみるとシュー



皮は普通のものより硬めで香ばしい、どこか懐かしさを感じる風味に我々の疲れた体は忽ち癒されたのだった。

京都には過去に3度訪れているが、左京を歩くのは今回が初めてで独特の風情を堪能できた。今回の自主研修は過去のどの旅より感動したものが多かったように思える。京都は古い街だが何度訪れても新しい発見がある。そんな街だと再発見できたいい旅だった。



日本文化研修を終えて ～古都京都を巡り～

1 部日本文化学科

2 年 2711191 峯本 慎太郎

今回古都京都などを巡り、日本の古き文化に触れてきました。

自主研修1日目では、嵐山へ行きました。嵐山は景観がきれいなことで有名で、桜や紅葉などで時期によっては大変賑わう観光地となっています。当然、京都ならではの寺社などもたくさんあり、京都の文化に触れるという名目なら必ず行きたいと考えていた場所です。

最初は渡月橋からの景観を楽しみました。渡月橋は、9世紀中ごろ平安時代に道昌という僧によって建てられた橋で、京都の桂川を渡るために重要な交通路として古くから重宝されています。また、『桂川』という作品で重要なモチーフとして登場するなど、嵐山でも象



渡月橋



天龍寺庭園

象徴的な建造物として扱われていることが理解できます。自主研修1日目の日は天候が不安定で、せっかくの景観を楽しめるかどうか不安だったのですが、運よく晴間に行くことができ、桂川から嵐山を一望して渡月橋を観ることができました。

続いて嵐山にある天龍寺を巡りました。天龍寺は室町時代に足利尊氏が後醍醐天皇を弔うために開基した寺で、古都京都の文化財として世界遺産にも登録されています。この寺では、庭園がとても趣がある特徴的なものとなっています。文化財に指定されるだけあって、非常に穏やかな景色と共に嵐山を観ることができ、冬の寂しい木々にも関わらず、美しさを感じることができました。いつか紅葉や桜がきれいな時期にもう一度訪れたいと思

うような美しい場所が嵐山だと今回感じました。



銀閣時展望台

嵐山のメインストリートはかなりの賑わいを見せていて、京都らしい土産物や食事など数多く取り揃えていました。それらを見ているだけで楽しく、メインストリートを歩いていろいろな店を回るだけで大きく

時間を使いました。おかげさ

までスケジュール台無し、嵐山楽しすぎです。結局ここで大きく時間を取られ、自主研修初日に、レポートに乗せることができるほどしっかり見たのは嵐山だけでした。笑えません。

自主研修二日目はまず北野天満宮に行きました。北野天満宮は全国屈指の知名度を誇る神社で、多くの観光客でにぎわう神社です。平安、10世紀初めにできた神社で、10世紀後期に一条天皇から「北野天満宮天神」の称が贈られ、その後多くの歴史的な人物から崇拝を受けた神社です。



中門・三光門

朝1番で向かったため人は少なく、境内をゆっくりと静かに回ることができました。国宝のある本殿や、その他の境内にある建築物も趣があり非常に見応えがありました。しかし、それ以上に境内の一部では、梅が咲いており、春を感じさせる風景に非常に感動しました。25日に天満宮には、梅花祭というものがやっているらしく、少し時期がずれていたのが惜しいなと思いました。続いて行ったのは銀閣寺。正式名称は慈照寺で、室町時代後期に8代将軍足利義正が将軍職を辞した後に作ったものである。この慈照寺は主に書画や茶の湯など東山文化を代表する建造物である。金箔が張られている金閣に対し、銀閣も銀箔を張る予定だったなどと言う説もあります。しかし、今回見学した限りでは、黒漆塗りの建物であってよかったと思います。というのも、この銀閣は東山の風景にとっても馴染んでいて、とても景観がきれいでした。もし銀箔など張られていたら、華やかではあったかもしれませんが、趣を感じることはなかったと思います。

境内から見る景色もよかったのですが、何より感動したのは参道にある展望台から一望できる銀閣寺一体と、京都の街並みでした。銀閣は全体的に趣のある非常に雅な景色でしたが、その建築物と、広く遠くまで京都の街並みが見渡せる展望台にはとても感動しました。高いところから見るきれいな景色なら他にいくらでもあります、歴史を感じつつ落ち着いた雰囲気を観ることができるのはここだけじゃないかと思ったほどです。

自主研修で巡った寺社仏閣は以上です。あとはこの巡った近辺と大



銀閣寺

阪で食べ歩きばかりしていました。太りました。本当はもっと行きたい場所がたくさんあったのですが、一つ一つの場所が想像以上に楽しく、思っていた以上に時間をかけてしまいました。やはり今度個人でもう一度京都へ旅行をしたいと思った次第です。稲荷大社など当初予定していたが行けなかったところを次は巡ります。

京都を巡って

1 部日本文化学科

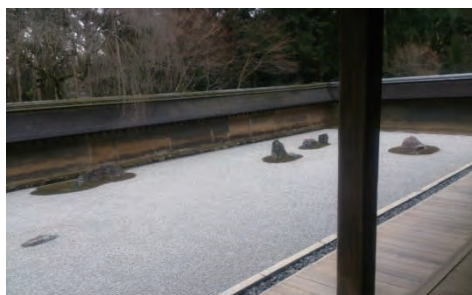
2 年 2711195 村上 悠人

私は、2月18～23日の5泊6日で行われた日本文化演習の関西への研修旅行に参加した。1、2日目は奈良を中心に団体研修、3日目は自主研修で京都を一日中まわり、4日目は滋賀方面を団体研修、5日目は自主研修で午前中は京都を回り、午後からは大阪を散策、6日目は国立民族学博物館で講演を聴いたのち館内を見学、そして大阪道頓堀を散策するという日程であった。

私自身、はじめての関西であった。そのため様々な場所を巡ったが、どこも新鮮な感覚で見て回ることができ、多くのことを吸収し楽しみながら学ぶことができた。

その中でも、3日目と5日目の午前中に巡った京都、中でも私が行った龍安寺、金閣寺、清水寺、銀閣寺は、「日本文化」を色濃く残し、過去からの伝統を守っていた。そこで私は、研修の中で最も多くのことを学び、また教科書や本などではわからない、直接見なければわからないことを理解し感じる事ができた。

まずは龍安寺。龍安寺は世界遺産であって、枯山水が有名である。私はそれくらいしか龍安寺のことを知らなかった。しかし実際に行くと枯山水は繊細で緻密であるが、その中にも大胆さも感じられた。また枯山水を囲む回りの木々は季節も関係して葉は落ちていたが春になれば桜、秋になれば紅葉といったように季節によって枯山水の景色の違いを味わえるものであると感じた。そして時間的に9時くらいに行ったため、まだ朝の清々しさが残っていてゆっくりとした時間を過ごした。



次は金閣寺である。金閣寺は行ってわかるが、さすがの壮大さであった。まさに室町幕府将軍で金閣寺を創建した足利義満が、自分の将軍としての地位と権力の見せつけていることが直接見ることでより理解できたし、深く感じる事ができた。当時これを見せられ、ここで茶会を

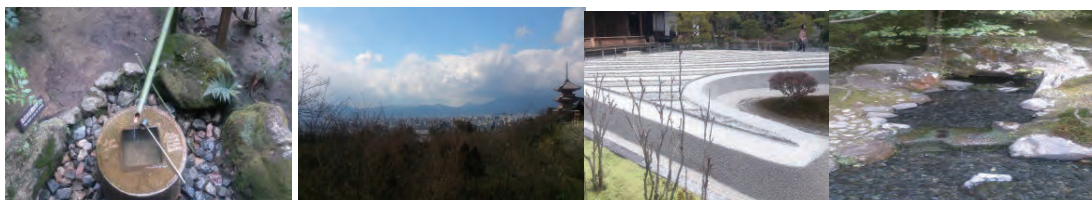
開かれたら義満にしたがってしまうだろう。金閣はここに載せた写真の角度以外にも正面、横、後ろなどどこから見ても違う表情をしつつ、どの角度から見ても壮大さ、緻密さを見て取れた。また、金閣以外の庭園の手入れや木々の配置など緻密に計算されていることも感じられた。

次は清水寺である。清水寺は京都の超有名観光スポットということ、時間帯も関係していたと思うが一番拝観者が多かった。場所的に東山の中腹くらいにあるため京都の景色が一望でき、京都の町の変貌を見てきたのだろう。清水の舞台は想定しているよりは若干低く感じたが、高さは結構あった。だが、神秘性が感じられた。ここから飛び降りた、また落ちた人の死亡確率が低いというのがわかる。少し離れた場所にあえる、最大の三重塔は工事中で本当の間近では見ることができなかったが、三重塔にしては大きく、間近で見たかったというのが率直な感想である。



最後は銀閣寺である。個人的には京都で訪れた中では一番心が安らぎ、京都文化、日本文化を感じた。私自身、銀閣寺は義満が創建した金閣寺と比較してしまうことがあった。その時は、銀閣寺の方が地味という印象を持っていた。だが、実際行ったことでその印象は覆された。銀閣は周りの庭園の木々などの邪魔をせず、また木々を活かしつつ共存していた。またお茶の井などの水源や小川は清く澄んでいて、流れの速さもちょうど良い流れであった。庭園の木々の手入れや配置は庭師の高い技術力を現代に活かし続けているのだろうと考える。他の季節には違う表情をするはずなので、それも見てみたいと思う。

銀閣寺を創建した足利義政は、先代で金閣寺を建てた義満とは違い将軍としての権力、地位を前面に押し出して見せつけるのではなく、庭園の木々がなす自然の美しさなどで人に安らぎを与え、自分の将軍としての地位を見せているのではないだろうか。



今回 5 泊 6 日の日本文化演習の関西研修に参加し本当に勉強になった。初めての関西と言うことで、観光気分で楽しみつつではあったが北海道に居てはわからない日本文化の本場で多くのことを吸収できた。また、現地の様々な人との話をし、関わりを持つことも出

来たのもよかった。

今回の研修で吸収したこと、学んだことはとても多く、日本文化学科にいる私にとっても大きな財産となった。これらを今後の大学生活、3年からのゼミなどに活かしていきたいと考えている。そして、またこのような経験を多くしていき、人間としても大きくなりたい。

飛鳥大仏、阿修羅像について

1 部日本文化学科

2 年 2711198 室井 竣

2月18日から23日の5泊6日の日程で京都をはじめとした関西地方への文化演習に参加した。私は高校時代に修学旅行で京都に行く機会がなかったので大変新鮮な気持ちで文化遺産に触れることができた。この研修旅行では滋賀県の彦根城や、奈良の平城京跡、飛鳥寺、大阪の国立民族学博物館など歴史的、文化的に貴重なものや場所に多くふれることができた。中でも私が関心を持ったのが仏教についてだ。そのきっかけとなったのが奈良県の飛鳥寺で日本最古といわれる飛鳥大仏をみたことだ。このレポートでは私が最も関心を持った仏教の分野の二つの事柄に絞り紹介する。

まず一つ目に前述した飛鳥大仏についてだ。飛鳥大仏は日本書紀によれば推古天皇の命により作られた日本最初の大仏である。姿の印象は後の時代のものに比べ頭が大きく、表情も目が大きく印象的な顔だ。飛鳥大仏の顔は右側から見ると険しい顔に見え、左側からみると穏やかで優しい表情をしている。手は右手に施無畏の印、左手に与願の印を結んでいる。右手の印は信じる者に降りかかる苦難を押しとめるという意味を持ち、左は信じる者の願いを叶えるという印だ。



また、飛鳥大仏をはじめとした日本の大仏の多くは手足に水かきを持っている。これは救いを与えるその手から一人も溢すことがないようにするためだ。この大仏は現在1404歳になる。それを知り私は「1400年もの間、人間の行いや世の中を見つめ続け、またその間毎日人に拝まれその願いを受け止め続けてきたのだな。」と考えると背筋が震える思いにかられた。

二つ目に興福寺の阿修羅像についてだ。私はこの研修旅行に参加する以前から興福寺の阿修羅像を見てみたいと思っていた。興福寺の阿修羅像は他に存在する阿修羅像とは違い、少年の姿をしており、その表情も他とは異なる物憂げな表情をしている。戦いの神であっ



た阿修羅が何故そのような表情をしているのか。その理由が気になったのだ。実際に興福寺を訪れ現在、阿修羅像が置かれている博物館の学芸員の方に質問してみた。学芸員の方のお話によると興福寺の阿修羅像は八部衆といわれる群像の中の一つだ。この八部衆の像も阿修羅像と同様に少年の姿をしている。これは一説によると光明皇后が子供を失い、その心を慰めるために少年の姿で作らせたのだそうだ。また、阿修羅像の顔の表情について学芸員の方に質問してみると、阿修羅像の顔の表情は見る者の心の在り方を映し出すのだそうだ。前向きな気持ち

で見れば凛々しく見え、後ろ向きな気持ちで見つめると苦悶の顔に見えるのだそうだ。そのことをふまえ自分でも研修後に調べてみた。その結果自分なりの解釈を持つことができた。阿修羅はインドの神話では戦いの神とされ、その存在は恐れの対象であった。そして、阿修羅は自身の強さに驕り、神に戦いを挑む。そして、敗北し仏門を守る神となった。興福寺の阿修羅像の右側の顔は唇を噛みしめ苦悶にも似た思いを読み取ることができる。それは自身の過去の戦いに明け暮れ驕り高ぶった姿を省みて自省の念を抱いているのではないだろうか。そして、左の顔は唇をまっすぐに結びやや下へ視線を置いている。これは自身の内面を見つめているのではないだろうか。戦いに明け暮れその結果自身の内面はどう変わったのか。何が間違っていたのか。自分の最も自分らしい在り方はどんなものであるか。と自問しているように見える。そして、正面の顔は眉間にしわをよせ前方を見つめている。私はこの表情は自身の過去、現在、未来を見つめ自身の過ちを背負い、苦しみながらも前に進むことを決意したような顔ではないかという解釈に至った。

また阿修羅像のポーズについてだが一番上の手は太陽と月を示している。インドの一部地域では阿修羅像は日食や月食をつかさどる神と考えられていたという神話もある。真ん中の手はもともと槍と弓を持っていたようだ。そのことが、戦いの神であったことを示している。中央の腕は拝む形をしておりこれは仏門を守る神となったことを示しているのだ。

以上に述べた二つの事柄が、私が日本文化演習で最も関心を持った事柄だ。研修中には多くの現地のボランティアガイドの方々や、バス移動中でのバスガイドさんのお話を聞くことができ、興味を持った分野を自分で調べる際にとても参考にすることができた。この研修をとおして学べたことは自身が興味を持った分野について問題提起し、調査することで自分なりの解釈を持つということだ。この研修は今後の学生生活を送る上で大変有意義な経験となった。

嵯峨野人情めぐり

1 部 日本文化学科

2 年 2711199 茂木 彩香

京都の烏丸通をひとりで歩いていたら、おじさんに道を訊かれた。地元の人に見えたのかも知れないと思うと、ちょっとうきうきした。大阪のアメリカ村周辺をひとりで歩いていたら、美容師の方に髪を切らせてくれないか、と声をかけられた。まるでスカウトでもされたかのような気分になり、ちょっとドキドキした。そんなこんなの 5 泊 6 日、ほぼ一人旅。

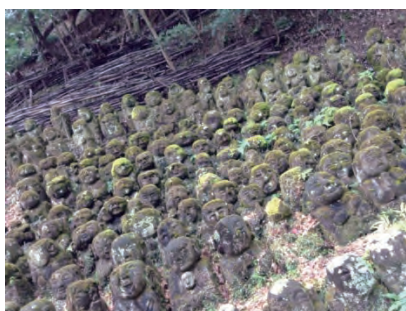
1 日目の自主研修では嵯峨・嵐山方面に向かった。私は運動が大の苦手だが、歩くことだけには自信がある。嵐山方面には泊まっていたホテルの近くからバスで向かうことにしていたが、1 日乗車券が有効な均一運賃区間は途中の嵯峨野高校前までしかなかった。そこで私は嵯峨野高校前でバスを降り、嵯峨嵐山駅を目指してひたすら歩いたのである。自分が乗ってきたのと同系統のバスに何度も抜かされながら、1 時間弱で嵯峨嵐山駅に着いた。

事前知識は少なく、色々な道を散策して辿り着いた寺社を片っ端から訪れようと思っていた。訪れることのできた寺院は多くはないが、事前に調査していた際に密かに行こうと決めていた場所が 1 つある。それが〈あだしのまゆ村〉であった。ホームページを見て、蚕の繭からつくられたというとても可愛い作品の数々に私はすっかり心を打たれてしまったのである。少々値は張るが見るだけでも・・・と思い、奥嵯峨まで足を延ばした。店に入ってみると、そこには 2 人の女性が座っていた。母娘だろうか、などと考えていると「いらっしゃい。今日は寒いねえ。お茶でも飲みなさい、お菓子もあるから。下の方から登ってきたのかい？」などと続けざまに話しかけられ、入って 5 分と経たずに店内の椅子に座ってお茶とお菓子をいただいた。初対面の人に沢山話しかけられるのは、少し苦手だった。なにより店内にはその母娘と私しか居ない。でも私は不思議と心地よく、お二人の話を聞いていた。いわゆる大阪のおばちゃんのような、せかせかした感じはなく、店内に射しこむ木漏れ日と足元でうなるヒーターの温かさがとても心地よかった。お二人は嵯峨のおすすめの場所などを沢山解説してくれ、地図に印を付けて渡してくれた。心が温まる出会いだった。いつかもう一度来ることが出来たなら、私はもう少し多く、お二人と話をしてみたいと思う。

その後は、あだしのまゆ村で紹介していただいた〈京都市嵯峨鳥居本 町並み保存館〉に



向かった。この奥嵯峨、嵯峨鳥居本地区は京都市によって「伝統的建造物群保存地区」に認定されており、美しい景観と古き良き建造物群がしっかりと保存されている。町並み保存館は明治時代に建てられた民家を利用しており、保存地区に認定されるまでの足取りや昭和初期の愛宕街道を再現したジオラマなどが展示されていた。そこに常駐しているらしい年配の女性の方が、わざわざお昼ご飯を中断して丁寧に説明してくれた。ここでもまた、人の温かさというものを感じた。説明を聞いた後に館内を自由に見て回り、挨拶をして出ようとする、おばあさんは既にご飯とテレビに夢中になっていた。



町並み保存館から更に坂を上っていき、愛宕(あたご)山のふもとの愛宕(おたぎ)念仏寺へと行ってきた。あだしのまゆ村の方も、町並み保存館の方も「ぜひ行ってみてください」と言っていたので頑張って上って行った。愛宕念仏寺は天台宗で、大正十一年に現在の場所に移築された。ここで有名なのが「千二百羅漢」であり、千二百人の一般参拝者によって彫られた個性豊かな「羅漢さん」が敷地内を埋め尽くしている。実際に行ってみると、入り口から早くもにこやかな笑顔の羅漢さんが出迎えてくれている。拝観料を払い中へ入っていくと、私の想像を遥かに超える数の羅漢さん。見渡す限りの羅漢さん。羅漢とは悟りを開いた高僧のことを指すが、こんなにバリエーションがあっているのかと思うほどの個性を発揮していた。そこには参拝者たちの願いが込められているのだろう。西洋風の顔立ちをしていたり(中には明らかにモアイ像と思われるものもあった)、赤ちゃんや犬を抱いている羅漢さんの姿もあった。二人の羅漢さんがぴったりと寄り添っていたり、大きく口を開けて笑っていたり。そんな沢山の羅漢さんを眺めていると、とても穏やかな気持ちになり、歩き続けた疲れも癒された。

私はこの旅行で、京都を愛する人々との貴重な出会いを経験した。私たちの中にある〈京都への憧れ〉は、京都に住み、京都を愛している方々の努力があってこそその代物なのかもしれない。



歴史的文化財めぐりを終えて

1 部日本文化学科

2 年 2711200 森 矢真人

京都の自主研修で最初に印象に残ったのは仁和寺である。

仁和寺は真言宗御室派の総本山である。平安時代に創建され、宇多法皇以来、明治になるまでの長い間にわたって、代々天皇家の皇子が住職を務めてきた格式あるお寺である。まずお寺の入り口には大きな仁王門がその歴史と格式を伝えるかのようにそびえている。造りも細かく、かなりの大きさでもあるのでいきなり

圧倒された。仁王門をくぐって奥に進むとご本尊・阿弥陀三尊像をお祀りする金堂がある。金堂はもともと御所の紫宸殿であったものを慶長年間に仁和寺に移築。当時の御所建築を知る上でも貴重な建築であることから国宝に指定されている。仁和寺の中で一番印象に残ったのは真言宗祖・弘法大師をお祀りする御影堂である。こちらは御所の清涼殿の古材を使って建てられたものであり、建物の中の雰囲気や庭が美しく厳かなものであったので心が静まりかえるほどの印象をうけた。さらに仁和寺には御室桜という有名な桜があり、春にはきれいな景色を見せてくれるらしいのだが、残念ながら季節がちがうのでそれを目にすることはできなかった。

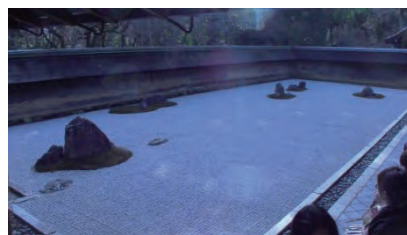
次に訪れた龍安寺も強く印象に残った。龍安寺は室町時代に細川勝元が妙心寺の僧を招いて創建したお寺である。こちらはなんとといっても白砂と 15 個の石で構成された石庭が世界的に有名である。この石庭の石はどの角度から見ても 14 個にしか見えない構成になっており、実際に見ても 14 個しか確認出来なかった。いまだにその構成の謎ははっきりしていないそうだ。こういった謎が残

っていて、それを探求することができるのも文化財の醍醐味であると直接見ることで改めて感じた。この龍安寺は世界的にも有名な石庭であるため、石庭にはかなりの観光客が集まっていた。

しかし今回の研修で一番印象に残ったのは前から一度見てみたいと思っていた興福寺の阿修羅像である。興福寺は南都六宗の一つ、法相宗の大本山の寺院である。阿修羅像は、734 年に建立された西金堂に造立安置された八部衆のうちの 1 つである。この阿修羅像は直接見ても繊細な造りで表情も微妙な感情をうまく表せていると思った。実際に行って三十三間堂の阿修羅像とも見比べてみたが、三十三間堂の阿修羅像は左右の首が肩口から出ていて首が太く見え、より力強い像に見えた。それに比べ、興福寺の阿修羅像は真ん中の顔から左右の顔が出ているような造りになっており、より繊細な美しい像になっているように感じた。



↑ 仁和寺・御影堂



↑ 龍安寺・石庭



↑ 興福寺・五重塔

今回の研修では今まで気になっていた場所に直接訪れ、直接見ることで細かい造りや雰囲気などを感じることができた。直接見比べることでわかった点もかなりあった。改めて歴史や歴史文化財を研究する立場において直接見るということは大事なことであるのだと再認識した。これからそういった立場で仕事をする機会があれば直接現地に行くということを楽しみにしたい。

京都探訪 —過去と現代が交差する都—

1 部 日本文化学科

2 年 2711207 龍崎 峻

2 月 18 日から 23 日まで、京都を中心に関西地方を巡り、普段は文献でしか見ることの出来ないような日本文化を身近に感じることが出来た。京都へ訪れたのは今回で 2 度目になるが、前回訪れた場所とは異なる場所を巡ったので、今回も発見と驚きの連続であった。

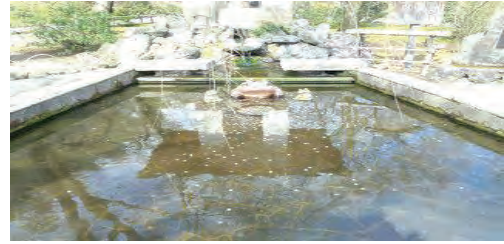


自主研修日は 20 日と 22 日の 2 日間あり、20 日には先ず嵐山へ訪れた。嵐山に到着しバスから降りた私たちを迎えたのは渡月橋であった。渡月橋は大堰川という川に掛かっており、この大堰川より上流が保津川、下流が桂川と呼ばれている。大堰川に橋を架けたのは、承和年間法輪寺を中興した僧、弘法大師空海の弟子である道昌で、法輪

寺の門前橋であったことから法輪寺橋と呼ばれていたそう。渡月橋と呼ばれるようになったのは、鎌倉時代に亀山天皇が、満月の晩に舟遊びをされ、月が橋の上を渡るように見えたことから、「くまなき月の渡るに似る」と詠われたことに由来する。

司馬遼太郎は『街道をゆく嵯峨散歩』の中で、渡月橋を「この景観には、大きく弧を描いた唐橋は似合わない。」と述べているが、私にとって初めて見た渡月橋とその景観はまさに絶景であった。

渡月橋を後にし、私はメインストリートを巡った。メインストリートでは多くの店が立ち並び、嵐山の中でも特に賑わっていた。メインストリートで土産などを見た後は、天竜寺で雲竜図と百花苑を眺めた。百花苑の先には曹源池に平和観音と愛の泉があり、私はその泉の水を啜った。愛の泉の湧き水は地下 80m から湧き出る霊泉で、この水を啜る者は愛と幸を受けると伝えられたことから「愛の泉」と呼ばれるようになったそう。泉の蛙は平和観音を守っているとのことだ。



曹源池を過ぎ、山側へ登っていくと私の目の前には竹林の小径が広がっていた。私の左右と頭上が竹に覆われ、日光が竹に遮られていたが、この小径を散歩していると不思議と心が洗われるような気持ちになった。

小径を通り過ぎてからは京都の一般家屋を眺めながら散歩していた。当然ではあるが札幌に立ち並ぶ家々とは異なり、どの家も古風で、私はまるで現代から過去に飛ばされたような不思議な感覚に陥った。



22日の自主研修では銀閣寺へ赴いた。臨済宗相国寺派の禅寺である。文明14年に室町幕府8代将軍である足利義政が祖父の3代将軍であった足利義満が建てた北山殿金閣寺（鹿苑寺）にならい東山山荘を設立した。完成を待たずに亡くなった義政の菩提を弔うために寺とされ、銀閣寺は通称であり正確には慈照寺である。

東山に訪れた時、私は庭園の美しさに圧倒された。中門をくぐると広い境内の中に我々が「銀閣」と呼ぶ観音堂や方丈（本堂）、東求堂などの建物や池、円錐形の上を切り取ったような形をした向月台、そして銀沙灘などが点在している。

この庭園の特徴は、やはり向月台と銀沙灘である。庭園の西北の隅、方丈の南面にあるほぼ四角の砂盛りを銀沙灘という。砂の高さは約60cm。初めて銀閣に来た私にとってこの銀沙灘は向月台とともに衝撃を受けた要因となった。

日本は決して大きな国ではない。しかし北海道にはアイヌ文化、沖縄には琉



球文化が存在している。またその他の地域にも様々な文化が存在し、時には古い文化と新たな文化を融合させ独自の文化を築き上げてきた。京都も同じく歴史的な文化遺産や街並みが「日本」というステレオタイプを、外国人や私たち日本人にも見せている。

今回の研修旅行では、地方によって多様な文化が存在する「日本」という国は非常に魅

力的であり面白い国だと気が付いた。また日本の国文化を間近で見ることができ、日本文化について改めて興味や関心を持つことのできたとても有意義な旅であった。

日本文化のあらゆる趣に触れる

2 部日本文化学科

2 年 2811135 樋口 麻紀

私が今回参加した日本文化演習は、5 泊 6 日という比較的長い期間の旅行であったものの、あっという間に時間が過ぎてしまったと感じるくらい密度の濃い研修になった。正直に言うと、日本的な雰囲気を感じたり、日本文化に関わる珍しいものが見られるならばそれで満足だという曖昧な気持ちしか持たないまま、今回の研修に臨んだ面もある。しかし研修で訪れた場所や触れるものの大半が、意外にも私が興味を持つ様々な事柄とリンクしていき、毎日心が動くことばかりであった。



研修初日から大雨という悪天候で、研修が終わるまでほとんどの時間は、雪と雨を繰り返し浴び続けていたような気がする。「北海道から来た方達だから、寒さには慣れているでしょう」とガイドの方や現地の方に何度も言われたが、北海道の冬の寒さと、関西の冬の寒さはまったく種類が違うのではないだろうか。そんな凍えるような寒さも思い出のひとつとなった。しかし、そんな中でも得したことがあった。それは、彦根城の美しい雪景色である。たくさんの雪が降ることが珍しい地域だから、なかなかこんなに美しい彦根城の雪化粧姿は見られないのだそうだ。咄嗟には貧困な感想しか浮かばなかったのだが、ポストカードのような景色だと初めに感じた。研修旅行では、この繰り返しであった。教科書の写真でばかり見ていたようなものが現実に目の前にあること、その経験は北海道ではなかなか出来ないから、日本文化の尊さにより一層圧倒されたのだろう。さて、この彦根城だが、リサイクル城と言われるように建物の資材は移築転用されたものが多い。また石垣は、加工されていない自然な石を積み上げていく牛蒡積みで造られており、崩れにくく頑丈なものなのだそうだ。以上のことから、彦根城は姫路城などと比べて派手さは無く、あまり見た目は洗練されていないかもしれないが、その素朴さが魅力なのではないかと感じた。

自主研修では、代表的な観光名所を巡っていきたいと考え、鹿苑寺金閣や清水寺などを訪れた。自主研修で行った場所の中で、鹿苑寺が一番印象に残っている。「金閣寺」と呼ばれるようになる程あまりに有名な舍利殿は、さすがに圧倒的な存在感であった。文字通り金ぴかで、先に話題に挙げた彦根城とは対称的な派手さを持っていた。しかし、私の心に

残ったのはむしろその周りの庭園であった。室町時代の代表的な地泉回遊式の庭園で、中心となるのは金閣と隣り合う鏡湖池である。「鏡湖池」という名は鹿苑寺を離れてからパンフレットで確認したのだが、なるほど良い名前を付けたものだった。金閣を美しく水面に映すための池として、人々にすばらしい景色を楽しませていた。外国人、日本人ともに観光客は多かったが、はじめは金閣ばかりをフレームに収めて写真撮影をしていた人も、鏡湖池の前ではその美しさゆえ、本物の金閣と、水面に映る金閣の姿両方を撮影せずにはいられないといった様子であった。私もその一人である。往路に従って歩く中で、自然とのコントラストで様々な金閣の姿を見ることができた。金色で派手だからというだけの理由でここまで有名になったのではないということを、この目で確認できたように思う。

さて、このレポートで用いた2枚の写真はいずれも、建物を大きく分かりやすく写しているものではない。建物をでかでかと撮影したようなものは、教科書でも見られる。そのようなものではなく、日本らしく風情のある景色を実地で感じてきたのだということを強調したいと考えたため、この2枚の写真を選んだ。コンクリートジャングルと言えるような風景が当たり前になってきた現在、人工物と自然物の対比を楽しむという機会が減っている。この研修で、庭園や木造建築、木彫りの装飾品などへの興味が深まった。今回の経験を生かし、これからの研究に役立てたい。

初めての関西旅行

2 部 日本文化学科

2 年 2811142 山下 凜

I. はじめに

高校の修学旅行では沖縄・東京に行った私にとって、今回の旅行は初めての関西旅行であった。この旅行では、関西のオーソドックスで有名な観光スポットをまわろうと計画し、自主研修を行った。二日間ある自主研修では一日は京都、もう一日は大阪をまわった。

II. 団体研修

団体研修で特に印象に残っているのは彦根城である。私自身お城が初めてであるため楽しみにしていた。当日は朝から雪が降っていたため、珍しい彦根城の雪景色を見ることができた。また、樹に積もった雪が桜にも見えて春に訪れたような感覚にもなった。

お城とはそもそも敵が攻めてきても落ちないように造られているのだから登るのは簡単ではないものなのだが、階段の幅や高さが一段一段違っているのには苦労した。特に降りるときは滑って転んでしまいそうになった。天守閣の中の階段も傾斜が 60 度もあって降りるのがとても怖かった。しかし苦労して登った甲斐があり上から見た景色はとてもきれいだった。

Ⅲ. 自主研修

(1)一日目

この日は京都内をまわった。はじめに行ったのは金閣寺(鹿苑寺)である。金閣を見た瞬間、私は素直に見とれてしまった。1年の基礎演習で三島由紀夫の『金閣寺』についてやったので写真を見たこともあるし、どれだけきれいであるのかは小説内で主人公が語っているの、金閣寺の美しさは十分理解しているはずだったのだがやはり写真で見るのと実際に自分の目で見るのは違った。上手く言葉に表せられないほどに舍利殿と池に鏡のように映った姿はきれいであった。一日見ていても飽きないかもしれないと、主人公の気持ちが少し分かった気がした。旅行前に軽く『金閣寺』を読んだので、まわっている間どのあたりで主人公は笛を吹いたのだろうかとかあの舍利殿の中に入ったのかなど考えていた。少しだけ作品の中に入った感覚がして楽しめた。次に行ったのは野宮神社である。野宮神社は『源氏物語』の中で光源氏が訪れていることや縁結び・学問の神様として有名な神社である。そんな野宮神社で売っている御守には、『源氏物語』をモチーフとしたものや十二単を着た女性の後ろ姿が描かれているもの等様々なデザインのものがありどれにするか迷ったが、私は『源氏物語』をモチーフとした御守を購入した。お昼は錦市場に行って食べ歩きをした。計画の時からチェックしていた「錦もちつき屋」のわらび餅や「こんなもんじゃ」の豆乳ドーナツを食べ、京都の台所と言われる錦市場を満喫した。次に清水寺に行った。清水の舞台から夕陽を見て、音羽の滝の水を飲めたので楽しめたのだが、地主神社に時間の問題で入れなかったことが心残りである。



この日は一日中京都をまわって、京都の文化を満喫することができた。

(2)二日目

この日は、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンに行ってきた。入ってすぐにシュレックやエルモに会えた。しかもエルモとは一緒に写真を撮ることもできた。セサミストリートは小さいころからテレビで見っていたし、エルモは大好きなキャラクターなのでとてもうれしかった。メインストリートで頭につけるかぶりものを買って、いざアトラクションへ。一番人気のある「スパイダーマン」でも40分待ちだったので比較的空いている印象だった。他にも「バック・トゥ・ザ・フューチャー」や「ジュラシックパーク」、「ターミネーター」、「バックドラフト」などいろいろなアトラクションを楽しんだ。右の写真はお昼にご飯を食べた「ディスカバリー・レストラン」で撮ったものである。映画「ジュラシックパーク」の中で出てくるティラノサウルスの化石が飾ってあるレストランで、キャストの方に撮ってもらった一枚。ユニバーサル・スタジオ・ジャパンにいと映画の中に自分が

入ったような錯覚を起こしてしまいそうになった。映画の文化を体感できて楽しかった。

IV. おわりに

今回の旅行では京都を中心に関西を満喫できた。私が住む札幌の街は新しいものばかりだけれど、関西は古くからあるものと新しいものが共存していると感じた。自主研修の一日目は古き良き京都の文化、二日目は現代を代表するパークのひとつ、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンを満喫してそのことがよくわかった。

旅行計画のレポートに書いた「五感をフルに活用し文化にふれ、旅行を友人と思いきり楽しむ」という目標も、欲を言うならもう少し聴覚も楽しみたかったが、達成できたと思う。



現実逃避研修旅行

2 部日本文化学科

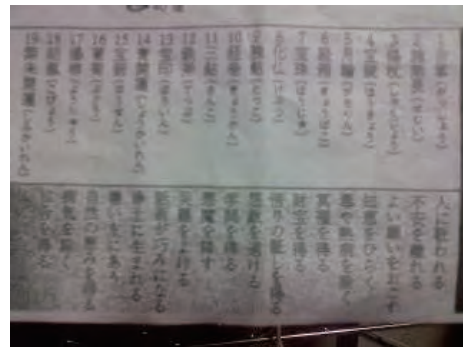
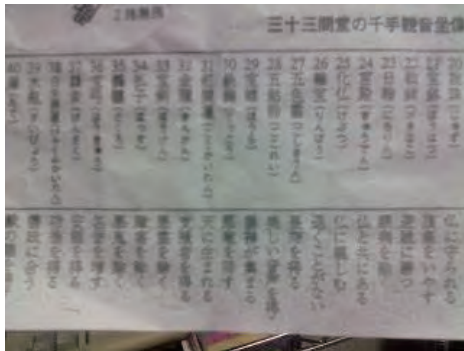
2 年 2811146 米倉拓斗

私は高校の修学旅行で関西に来た事があったので今回の関西は二度目だった。雪を見なくてすむと思ったが冬の関西は寒く、雪が降っていた。「北海道の寒さに比べたらねえ。全然でしょ？あははっ。」と道外の人に言われるが、北海道人でも寒いものは寒いのだと思った。私は 15 度でも寒いと思っている。この報告書のためにもっと写真を撮っておけばよかった。

さて、印象に残ったことはと聞かれると二日目に行った興福寺の仏像が印象に残ったと答える。何体もの仏像があったがその中でも阿修羅像と千手観音像が素晴らしかった。私はこれまで阿修羅と聞くとキン肉マンのアシュラマンを思い浮かべていたが、これからはあの阿修羅像を思い浮かべるであろう。阿修羅は戦の神であるために恐ろしい顔をした逞しい像が作られる事が多いが興福寺の阿修羅の像は写真の通りである。戦に疲れ、仏に帰依したため何ともいえない表情の少年顔であり、体格も貧弱である。この阿修羅像は興福寺にしかないそうだ。阿修羅像の前斜め上から照明が当たっているためシルエットがとても神々しかった。



また千手観音像についてはもうずっと見ていられた。42 本の手には一本一本意味がある。写真を載せておく。



頭に乗っている小さな顔たちは困っている人を一人も見落とさないために複数ついている。一番上の顔は如来菩薩で千手観音の上司に当たるらしい。ということは千手観音はまだ修行中ということなのである。42本も手があってまだ修行中とはなんて厳しい世界なんだと思った。変な話千手観音というぐらだから千本手があると思っていたがそういうわけではないことがわかった。この二体の仏像のおかげで仏像に興味を持つようになった。一体一体の表情が細かく豊かであり、感慨深いものである。

あと事前にレポートにも書いたが初めてユニバーサルスタジオジャパンに行った。とっても楽しかった。せっかく来たのだから普段の自分のテンションに合わない買い物をしようとおもったのでピンクパンサーの被り物を買った。浮かれている。3Dが使われている乗り物が多く、最先端は素晴らしいと思った。悪者に襲われそうになったとき、スパイダーマンが助けてくれたのがいい思い出。アトラクションの女優さんの演技が素晴らしく、照明が当たってない場面でも細かな演技を見せてくれた。人を楽しませるという事はこういう細かなところまで徹底しないとイケないものなのだなと勉強になった。



この研修旅行はストレスや悩みを忘れるのにいい旅行だった。串かつもお好み焼きも食べたし、ユニバーサルスタジオジャパンにも行ったし、仏像に心安らいだ。この旅行のおかげでまた日々の生活をがんばろうと思えるようになった。いい旅行だった。

関西を訪れて

2部 日本文化学科

2年 2811125 筒井 千尋

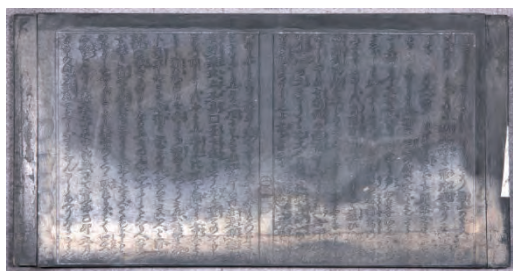
今回の関西研修旅行では、五泊六日という少し長めの期間に、高校の修学旅行などでは訪ねられないような場所をたくさん回ることが出来ました。

1日目は生憎の悪天候ではありましたが、とても大きく重い石が積まれた石舞台古墳を

間近で見物することができた上に、地元の方が写真などを用いて丁寧に説明して下さい、充実した時間を過ごせました。その後に足を運んだ飛鳥寺では、本尊飛鳥大仏を目の前に正座し、詳しいお話を聞きました。お寺の床はやたらと冷たく少々つらい部分もあったのですが、仏像を造った鞍作鳥や、仏像の指の間に存在する膜などについて真剣に教えて下さり、寒さなど忘れてしまうほど言葉とお寺の空気に圧倒されてしまいます。



2日目は興福寺の国宝館にて、気品と迫力と奥ゆかしさあふれる多数の仏像にお目見えしました。これは日本史の教科書で見たことがあるぞ！すごい！という感動と共に見て回りましたが、驚いたことがひとつありました。私達と国宝の仏像を隔てるガラス板などは存在せず、直に見て直に空気を感じることが出来るのです。遮る物が無いだけでこんなに近くで堪能した気分になれるものなのですね。奈良大学では、普段馴染みのない板木に



についての講演を聴くことができましたが、これがまた面白いのです。最初に机の上に置いてあった板を見たときは単純に「何だこれ」と訝しく思ってしまったのは事実ではあります…。しかし、実際に板木や絵に触れてまじまじと見つめる機会を設けて下さったので、板チョコほどのスペースにびっしりときれいな文字が彫られている様子をじっくり見つめ、木のあたたかみに触れることが出来ました。板木とは何かという初歩的な内容から、作り方、使い方、板木の学術的価値、板木につけられた試し切りの痕から何が読み取れるか…など様々なお話を聴くたびにどんどん引き込まれていき、人の手に触れられたものはやはり良いなあと感じました。あまり売れなかった板木の表面を削って再利用するリサイクル精神は現代人と変わらないのだなあと親近感を覚えることも出来ました。国宝級に特別なものでなくとも、研究し続けると新たな発見があり、私達を楽しませたりなるほどと思わせたりすることがたくさんあるのですね。



京都周辺の自主研修に関しては、正直研修と言うより普通の観光に近かったです。わからないことだらけで戸惑うことも多々ありましたが、京都の人々の優しさに助けられつつ無事回ることが出来ました。京都は本当に良いところです。優しいです。良いです。金閣

寺を訪ねる外国人の多さと、「外国人は何故中にも入らず入り口前で記念写真を撮っているのか」という予想外の疑問にたじろぎつつも、荘厳な金閣寺の周りをそろそろと歩きました。観光地に訪れる外国人の行動について研究すると少し面白いかもしれないなあ、とうっすら考えつつ、嵯峨野にある野宮神社へ。そこで中学生の集団と鉢合わせてしまいげんなりしつつも境内の奥へ進んでいくと、狐の像がある場所の前にたどり着いたのですが(恐らく白福稲荷大明神と思われる)、私達は賽銭も入れずに「帰りの飛行機が無事飛びますように…」などとはよくわからないお願いをしておりました。そのほかに清水寺にも行きましたが、改修工事中のクレーンが歴史あるお寺と重なり夕日の中に斬新な景色を生み出している光景、というなかなか貴重なものを見ることが出来ました。自主研修で何を学ぶことが出来たのかは正直謎です。

4日目は天候に恵まれず、滋賀県は大雪。しかし雪化粧をした彦根城を歩くという滅多にない機会であり、ガイドさんの城壁中心の説明を聴きつつ雪道を歩いておりました。積み重なる石の裏にはこんな秘密が…と、わくわくしながら回りました。ひこにゃんに会えなかったのはちょっと残念です。その後延暦寺に訪れ、寒い中お話を聴かせて頂きました。1200年間灯り続ける法灯からは不思議な空気が漂っていたように思えます。近江八幡巡りでは新町通りの旧西川邸などを見ることができ、独特の家の造りの中に人々の暮らしが垣間見えて面白かったです。だだっ広い商家の家ではあるけれども、雛飾りや庶民的なダンスからぬくもりを感じました。

最後に国立民族博物館を見学しました。民俗学が気になる私にとってはこの日がハイライトと言っても過言ではありません。たくさんの方の文化が所狭しと色々な形で展示されており、非常に楽しめました。それぞれの国の人々がそれぞれの方法で発展し、彼らが創りあげた独自の服・信仰・住居・食べ物・音楽・言葉を私達がこの目で見る事ができるのは凄いことです。見ることで知識と興味がより深まったので、この意欲をこれからの勉学にうまく生かしていきたいと思います。



この研修のプランにはぱっと見て「あまり興味がないなー」と思う訪問先もちらほらあったのですが、実際に見たり話を聞いたりすることで考えは変わりました。分野ごとに違いうように見えても根本では似通ったところがあり、食わず嫌いで選ぶにはもったいないものです。それがわかっただけで十分収穫ではありますが、趣味感覚で楽しく学べたので素晴らしい旅行となりました。

日本文化演習報告書 第2号

発行日 平成25年3月25日

発行 北海学園大学 人文学部

印刷 株式会社パスカル・プリンティング
